

たつの市御津町

室津四丁目遺跡

たつの警察署室津駐在所舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月

兵庫県教育委員会

たつの市御津町

室津四丁目遺跡

たつの警察署室津駐在所庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24（2012）年3月

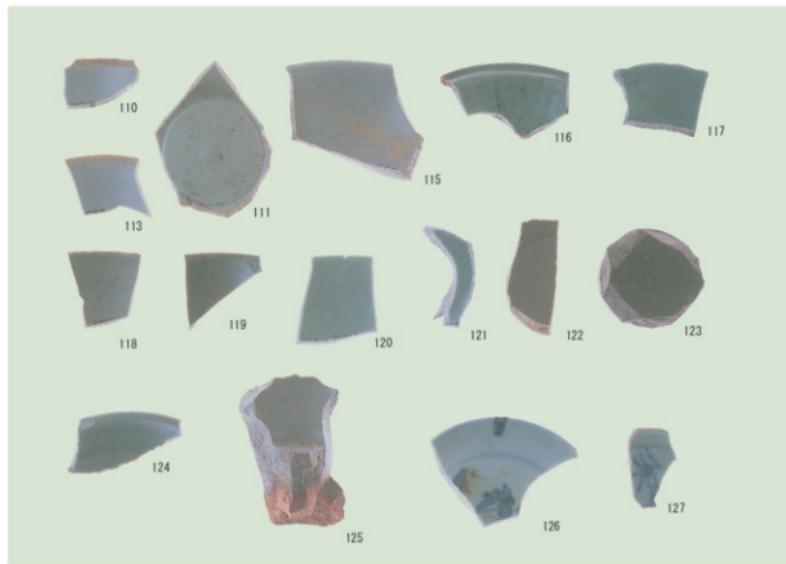
兵庫県教育委員会



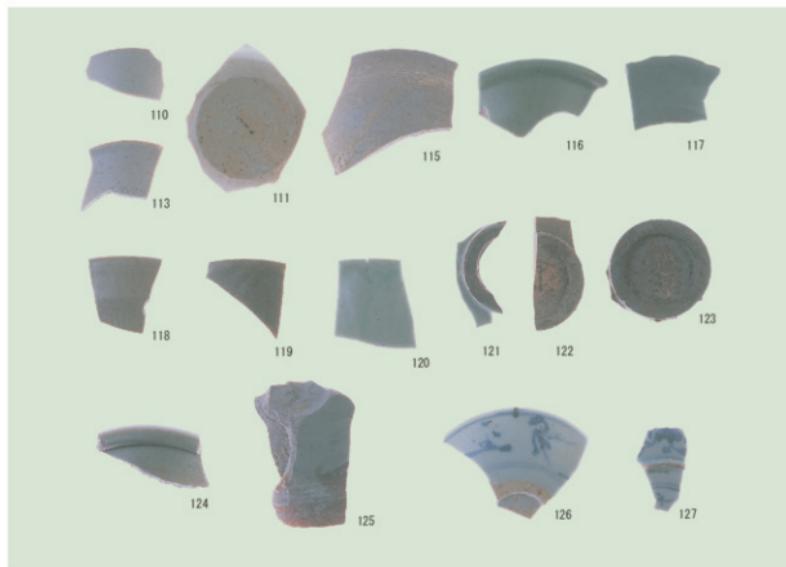
庁舎地区 南壁土層断面（北西から）



出土備前焼 瓢



出土陶磁器（内面）



出土陶磁器（外面）

例 言

1. 本書は、たつの市御津町室津に所在する室津四丁目遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、たつの警察署室津駐在所庁舎新築工事に関連するもので、兵庫県警察本部の委託を受けて、平成22年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理作業は、平成23年度に兵庫県立考古博物館において実施した。
4. 遺物写真撮影は、株式会社地域文化財研究所に委託して実施した。
5. 本書の執筆は長濱誠司・村上泰樹が分担し、編集は池田悦子の補助をえて長濱が行なった。
6. 出土品整理作業においてはパレオ・ラボAMS年代測定グループに放射性炭素年代測定を依頼し、その成果を本報告書に掲載した。
7. 本書で使用した地図・図面は以下のとおりである。

第2図 兵庫県警察本部総務部会計課作成の工事用図面を変更・再トレース

第3図 御津町教育委員会「室津 伝統的建造物群保存対策調査報告書」1987年 P 48掲載図に加筆・再トレース

第4図 国土地理院1/200,000地勢図『姫路』(2006年発行)、『徳島』(2005年発行)、『和歌山』(2003年発行)、『京都及大阪』(2006年発行)に加筆

第5図 国土地理院1/50,000地形図『播州赤穂』(1993年発行)、『姫路』(1993年発行)に加筆

第6図 岸本道昭氏提供

8. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県立考古博物館で保管している。

9. 現地調査および整理作業の際には、地元の方々をはじめ、関係各機関のご協力をいただいた。感謝の意を表す。(敬称略)

たつの市教育委員会 岸本道昭

凡 例

1. 本書で示す標高値は兵庫県警察本部総務部会計課が作成した工事用図面に用いられた数値を用いる。調査対象地付近の東京湾平均海水準(T.P.)は25m前後である。方位は座標北を指す。
2. 遺構は種類ごとに1から通し番号をつけている。
3. 遺物には土器・土製品・石製品は1から通し番号をつけている。金属製品はMをつけて、他の遺物と区別している。遺物の番号は、本文・図版ともに統一している。
4. 土器の断面は須恵器を黒塗りとした。
5. 土器の色調や土層などの表記については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1999年版を使用した。

本文目次

第1章 調査にいたる経緯	長濱誠司	1
第1節 調査の契機		1
第2節 発掘調査の経過体制		1
第3節 出土品整理作業の経過体制		3
第2章 遺跡の環境	長濱	4
第1節 地理的環境		4
第2節 歴史的環境		5
第3節 室津		7
第3章 調査の結果	長濱	10
第1節 概要		10
第2節 基本層序		10
第3節 道構		13
第4章 出土遺物	村上泰樹	16
第5章 放射性炭素年代測定	パレオラボ AMS 年代測定グループ	29
第6章 まとめ	長濱	31
報告書抄録		38

挿図目次

第1図 遺跡の位置	iv
第2図 調査区の位置	1
第3図 室津の町割と調査地点調査区の位置	2
第4図 室津の位置と播磨の主要港湾	4
第5図 周辺の遺跡（1）	6
第6図 周辺の遺跡（2）	8
第7図 庁舎地区 平・断面図	11
第8図 門地区 平・断面図	12
第9図 土塙墓 土層断面	13
第10図 土塙墓 出土遺物	13
第11図 埋壺造構	14
第12図 埋壺造構遺物	15

第13図 包含層出土遺物 (1)	25
第14図 包含層出土遺物 (2)	26
第15図 包含層出土遺物 (3)	27
第16図 包含層出土遺物 (4)	28
第17図 曆年較正結果	30

表目次

第1表 土師器皿の特徴	16
第2表 出土土器の様相	22
第3表 測定試料および処理	29
第4表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果	30
第5表 出土土器観察表 (1)	34
第6表 出土土器観察表 (2)	35
第7表 出土土器観察表 (3)	36
第8表 出土土器観察表 (4)	37
第9表 出土土製品観察表	38
第10表 出土鉄製品観察表	38

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版1 庁舎地区南壁土層断面 出土備前焼甕

巻頭写真図版2 出土陶磁器 (内面・外面)

写真図版目次

写真図版1 室津港遠景 城山から見た室津港 調査対象地
写真図版2 調査対象地 庁舎地区全景 庁舎地区全景
写真図版3 土塙墓 土塙墓検出状況 土塙墓遺物出土状況
写真図版4 甕1～3 甕1・2 甕1 甕2 甕3
写真図版5 南壁全景 南壁アップ 北壁 北壁 北壁西半 北壁東半 甕検出状況
写真図版6 門地区全景 西壁断面 石列
写真図版7 土塙墓出土遺物 甕1～3
写真図版8 包含層出土遺物 (1)
写真図版9 包含層出土遺物 (2)
写真図版10 包含層出土遺物 (3)
写真図版11 包含層出土遺物 (4)
写真図版12 包含層出土遺物 (5)



第1図 遺跡の位置

第1章 調査にいたる経緯

第1節 調査の契機

兵庫県警察本部はたつの警察署室津駐在所庁舎の新築事業を計画した。事業は従来の庁舎の建て替えであるが、駐在所の所在する室津は歴史的な港町の景観が残ることから、道路に面した敷地前面には景観に配慮した和風門を新設する。また庁舎および門の基礎工事として、庁舎東端の深度を基準に地表から約1.05m掘削し地盤改良を行う。

室津は古来よりの港湾都市として知られているが、すでに宅地化され遺物の散布状況は明らかにしない。事業対象地は周知の遺跡ではないものの、周辺には近世の湾岸施設や宿駅施設の跡があり周知の遺跡となっている。事業対象地はこれら周知の遺跡の隣接地であるため対象地内にも遺跡の所在する可能性が考えられた。また計画された工法では埋蔵文化財が所在した場合、影響を及ぼす可能性があるため、事業対象地内の確認調査を行うこととなった。

第2節 発掘調査の経過と体制

1. 確認調査の概要

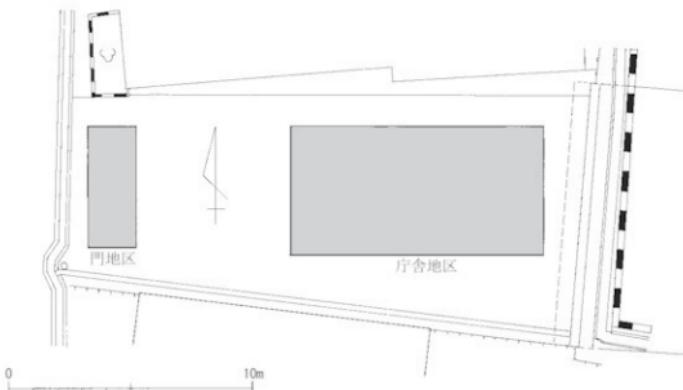
遺跡調査番号 2010186

調査年月日 平成22年8月11日

調査面積 5 m²

調査担当 上田健太郎

庁舎建設範囲と東端山裾の擁壁設置箇所においてトレンチを設定し調査した。その結果、複数の盛土層が確認でき、上層で16～17世紀初頭、下層で13世紀後半～15世紀前半の遺物が出土した。山裾の擁壁設置箇所のトレンチでは後世の掘削により盛土層などは確認できなかった。庁舎建設範囲では調査により埋蔵文化財の存在が認められたため、本発掘調査に移行することとなった。



第2図 調査区の位置



第3図 室津の町割と調査区

確認した遺跡は当該地の字名をとて「室津四丁目遺跡」とした。ただし地籍図による地名は「四町目」であり、現状では「丁」と「町」の使用に混乱が見られるようである。室津の地名は明治初期に一～八町目に変更されたもので、賀茂神社付近を一町目とし、海岸線を右まわりに二町目以下が続いて港北側が八町目となっている。したがって調査対象地は地理的には室津の町の中央付近に位置している。調査対象地一帯の近代以前の地名は尾之町であり、調査対象地付近はその中で南尾之町に該当すると思われる。

2. 本発掘調査の概要

遺跡調査番号 2010190

調査年月日 平成22年8月25日～9月1日

調査面積 60m²

調査担当 岸本一宏・長濱誠司

調査対象は序舎および門の地盤改良が行われる範囲である。調査対象とする深度は工事の影響が及ぶ地表から深度1.05mまでとし、これ以下については現状保存されるため調査の対象としなかった。

また残土置き場が十分でないため、序舎部分の掘削は調査区を南北に2分割して行った。

第3節 出土品整理作業の経過と体制

遺物整理作業は、出土遺物を県立考古博物館に搬入し、水洗い・ネーミングから報告書刊行までの作業を平成23年度の単年度で行った。

整理の体制

事務担当 篠宮 正

工程管理担当 山本 誠・深江英恵

保存処理担当 岡本一秀

整理担当 長濱誠司・村上泰樹

担当嘱託員 水洗い・ネーミング：

西口由紀・小林陽子

接合・補強・復原：

島村順子・荒木由美子・荻野麻衣・小野潤子

実測・トレース・写真整理・遺構図補正・レイアウト：

池田悦子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

室津の所在する兵庫県たつの市は兵庫県南西部、西播磨地域に所在する。市域は播磨を代表する河川揖保川沿いにひろがり、北は中国山地、南は瀬戸内海に面する。東西15.7km、南北29.8kmを測り、南北に長い。面積は210km²。この市域はいわゆる「平成の大合併」によるもので、平成17年に龍野市と揖保郡新宮町・揖保川町・御津町の1市3町が合併したものである。

室津はたつの市御津町（合併前は揖保郡御津町）に所在する。御津町域は、瀬戸内海沿いにひろがり東西9.14km、南北5.98kmを測る。面積は17.97km²であり、たつの市の市域の約1割を占める。東に姫路市、北に旧揖保川町、西に相生市と隣接するが、東は揖保川、北と西は山塊によって隔てられる。御津町は西部の旧室津村と東部の旧御津村に分かれ。町域は行政区分だけでなく地形も顕著に異なる。東部は遙浅の海浜と平野、西部は山がらで沈降海岸となる。町域の海岸線は景観に優れるため瀬戸内海国立公園に指定されている。平野部は揖保川に面した東部にみられるのみで、長く湿地であったという。

室津は姫峨山（標高265m）の南麓に所在し、瀬戸内海に面する港町である。東側には姫峨山から派生した城山（標高51m）があり、南へのびる尾根が岬となる。さらに北西へのびる尾根も岬となって湾をつくる。この景観は『播磨國風土記』では「此泊 防風如室」と記し室津の地名の由来となっている。海岸線に沿って集落が形成されるが東部の平野部は山塊によって隔絶し、可耕地も少ない。

御津の地名は『播磨國風土記』揖保郡条浦上里の記事において「息長帶日充命 宿御船之泊」に由来するとされ、この地が古来より海上交通の要衝であったことを物語る。また室津については前述した『播磨國風土記』のほか、時代は下るが『高倉院嚴島御幸記』（1180年）でも「山まはりて、その中に



第4図 室津の位置と播磨の主要港湾

池などのやうにぞ見ゆる。舟どもおほく着きたる。」と港などの地形的な特徴を記載している。そして当時とは同じ景観を今日でも見ることができる。

この地は主要港湾であるだけではない。港の沖合に所在する辛荷島（唐荷島）や家島を詠んだ歌が『万葉集』にあり、航路を行く者にとって特別な感情を抱かせる海域でもあったことが伺える。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

碇岩南山遺跡は始良Tn火山灰層と三瓶U2火山灰層の間でナイフ形石器を中心とする2つの石器群を検出し作業場と想定される。

縄文時代の遺構は検出されていないが、朝臣オノ木遺跡で中～後期、稚富遺跡で後期～晩期の土器が、碇岩南遺跡では石器が出土している。

弥生時代

御津町内での弥生集落の状況は明らかでない。揖保川西岸にある中島上吉氣遺跡では旧河道から多量の土器が出土し、付近の自然堤防上には弥生時代前期に始まり中期後半に盛期を迎える集落が想定されている。この集落は西播磨の弥生集落の多くと同様に後期までは存続しない。その他町内では後期の集落の様相は明らかではない。揖保川東岸に所在する和久遺跡は弥生中期～古墳時代初頭の大規模な集落遺跡であり、多数の住居跡が検出された。

袋戻浅谷遺跡では発掘調査により中期～後期初頭の土塁墓、弥生前期の土器棺墓群が検出される。

古墳時代

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての墳丘墓、さらにそれに続く成立期の前方後円墳が顕著なのがこの地域の特徴である。綾部山古墳群では石圓い石槨を主体部とする39号墳の発見により從来古墳時代中期以降の古墳とされた中に庄内期の墳丘墓があることが判明した。墳丘の形状などから周辺にはさらに同時期の墳墓が数基存在する可能性が指摘される。岩見北山古墳群には積石塚状の墳丘墓7基がある。同様の墳墓が讃岐地方に見られることから海を介した播磨と讃岐の関係が指摘されている。岩見北山古墳群は積石塚状の墳丘墓7基よりなり、1号墳の竪穴式石槨からは「長宜子生」銘のある内行花文鏡が出土している。また4号墳の墳丘は前方後円状を呈し、時期は弥生末～古墳前期と推定される。椎現山古墳群は100基以上の古墳で構成される大規模な古墳群であるが、最高所に前方後方墳の50・51号墳が築造される。51号墳は発掘調査により特殊器台形埴輪と三角縁神獸鏡が共存することが明らかとなった。やや下がった尾根上には前方後円形の105号墳などの一群があり、50・51号墳に先行する墳墓が存在する可能性がある。金剛山古墳群、宝記山墳墓群の中にも前方後円状の墳墓がみられる。

奥塚古墳は新舞子海岸背後の基山山頂にある4世紀後半の前方後円墳である。現状では後円部のみ残存するが推定全長106mを測る西播磨を代表する首長墓である。綾部山古墳群は5世紀以降の小規模な前方後方墳を含み、被葬者は奥塚古墳を繼承する人物と考える。椎現山古墳群に隣接する朝臣古墳群は地域最大級の大型円墳である4号墳があり、また尾根上から阿蘇凝灰岩製舟形石棺蓋石が出土している。山王山古墳は長大な竪穴式石槨をもつ5世紀の方墳である。碇岩北山古墳群、碇岩馬道古墳群の中にも古墳前～中期と推定される古墳が尾根上に分布する。



第5図 周辺の遺跡(1)

1. 室津四丁目遺跡
2. 室山城
3. 室津正法寺山遺跡
4. 室津大浦散布地
5. 岩見北山古墳群・遺跡
6. 稲富遺跡
7. 綾部山古墳群
8. 輿塚古墳
9. 基山古墳群
10. 武山城
11. 中島上吉氣遺跡
12. 山王山古墳・小丸山古墳
13. 朝臣才ノ木遺跡
14. 朝臣古墳群
15. 雜山城
16. 瓦岩南山瓦窯
17. 瓦岩南山遺跡・窯跡群
18. 瓦岩菰田荒谷古墳群
19. 瓦岩北山古墳群
20. 瓦岩馬道古墳群
21. 椿現山古墳群
22. 椿現山・梶山古墳群
23. 南山賀茂神社裏古墳群・金剛山古墳群
24. 金剛山庵寺
25. 袋尻浅谷古墳群・遺跡
26. 宝記山古墳墓群
27. 金剛山古墳群
28. 古網干遺跡
29. 和久遺跡
30. 沖代遺跡
31. 緑ヶ丘窯跡群
32. 壱根古墳群
33. みかんのへた山古墳
34. 生鳥古墳群

後期に入ると尾根筋上に横穴式石室が造られ始める。穹窿式の石室がみられるのもこの地域の特色であり、渡来人との関係が伺える。小丸山古墳は6世紀代の小型の前方後円墳で前方部と後円部に横穴式石室をもつ。後円部の石室は穹窿式の系譜にあると考えられ装飾付台付壺などが出土する。椿現山古墳群では後期から終末期の横穴式石室が多数築造されるが、その中には穹窿式の系譜にある石室が存在する可能性がある。岩見北山古墳群の中にも古式の横穴式石室が存在する。袋尻浅谷古墳群は横穴式石室を内部主体とする古墳群である。3号墳からミニチュア炊飯具や子持器台が出土し渡来人の関連が指摘される。綾部山古墳群では後期に入っても造墓活動が続く。壹根古墳群・生鳥古墳群など海に基盤をもつと思われる古墳も築造される。椿現山古墳群では終末期まで造墓活動が続く。それに隣接する瓦岩菰田荒谷古墳群、瓦岩馬道古墳群、瓦岩北山古墳群は無袖の横穴式石室を埋葬施設とする終末期に近い古墳群である。

集落遺跡は御津町域では確認されていないが、和久遺跡に近接する沖代遺跡で古墳時代初頭の住居を検出している。

碇岩南山窯跡を含む碇岩一帯では古墳時代後期に須恵器生産が行われる。小丸山古墳出土の須恵器はここで生産された特徴をもつものが含まれる。

古代

『播磨国風土記』掛保郡条浦上里の記事において御津の地名は「息長帶日先命 宿御船之泊」に由来するとされ、この地が古来より海上交通の要衝であったことを物語る。

稻富遺跡では遺構は確認できないが、官衙や寺院を想定しうる土器がまとまって出土している。金剛山廬寺は伽藍配置など不明であるが塔心礎が現存し、推定寺域の北東隅に瓦窯があった。出土した瓦から7世紀末創建、9世紀前半に廃絶したと推定される。碇岩南山瓦窯跡は半地下式ロストル式平窯を検出した。ここで生産された播磨國府系の瓦から終焉時期は9世紀後半とされる。この時期は山崎断層を震源とする貞觀10年の地震と関連するとの指摘もある。相生地域では古墳～平安時代に須恵器生産が行われる。平安期は相生窯址群の最盛期である。生産地域が拡大し、緑ヶ丘窯跡群を含む入野地区でも生産が行われるようになる。

中世

古網干遺跡は掛保川東岸河口から約2km上流に位置する。港湾施設の遺構は見つかっていないが、12世紀代の段階で貿易陶磁器、国内各地の土器、石鍋などが出土している。室津大浦散布地は中世土器が海岸線に散布し、室津に関連する港湾施設の可能性がある。稻富遺跡では鎌倉時代以降の土器が多量に出土し、特に15世紀以降の出土が顕著であり付近に所在する円融寺との関連が指摘される。

第3節 室津

「意見十二箇条」（914年）によれば室津を指す楷生泊は、韓泊・魚住泊・大輪田泊・河尻泊とともに山陽・西海・南海3道で1日行程を測って設置した拵播五泊の1つとされ、行基が整備した伝承をもつ。伝承はともかくとして、室津港の起源は古代において交通路の整備にあわせて風待ち、潮待ちの港として整備されたことにさかのほると推定される。播磨灘から大阪湾への海域は、航海に危険が多く、一方で良港に恵まれない。その中で室津は、『播磨国風土記』の記述にみられるような波静かな港を有し、瀬戸内海航路の中で主要な位置を占めていたことは想像に難くない。

室御駅は播磨における賀茂神社領莊園の1つであり、少なくとも平安末には成立している。港を外海と隔てる半島の突端にある賀茂神社は、御駅になった際に勧進したとされ、五社造りの社殿など多くの文化財が残る。平氏は瀬戸内海沿岸の多くの港を支配し、福原京・兵庫津を拠点として瀬戸内海の海上権を支配した。その整備の中で室津も航路の拠点の1つになっていたことが考えられる。集落内の寺院には平安期の仏像が残り室津がこの時期盛期の1つを迎えていたことを物語る。良港をもつ室津は瀬戸内海の制海権をめぐる戦いの場ともなった。源平合戦の中で1183年室津に平氏が布陣、翌1184年室泊が平氏により焼き払われる。

室津は中世を通じて戦いの場ともなった。港の背後の尾根上には室山城が築城される。同地ではすでに源平合戦の中で平家軍が陣を構えたとされるが、明確な起源は明らかでなく、地誌によれば城は元弘年間（1331～1333年）に赤松則村が築城したとされる。同時に室津も赤松氏が支配したが嘉吉の乱により赤松氏が没落、その後は山名氏が入り播磨支配の拠点とした。応仁の乱（1467年）後赤松正則が播磨



第6図 周辺の遺跡(2)

を回復、浦上則宗が城主となる。1537～1540（天文6～9）年には尼子氏の攻撃を受ける。室山城の最後は1564年赤松政秀の攻撃により落城したとされる。

中世末において織田と毛利勢が東西から播磨進出を企て、激しい攻防が繰り広げられた。1577（天正5）年毛利勢が室津へ上陸。室津は毛利の支配下となったが、翌1578（天正6）年に大阪湾で敗退した後は室津を含む播磨灘が織田勢の支配下になったとみられる。この時入った小西行長の影響で室津では

キリスト教も広まる。

関ヶ原合戦以後は池田輝政が姫路に入り播磨を支配する。その後御津町域を含む揖西郡は龍野藩領となるが、室津は明治に至るまで姫路藩の飛び地とされた。池田輝政が姫路に入城後に領内巡視のための宿舎「茶屋」（御茶屋）の1つを室津に設置している。また17世紀中頃に柳原多忠次が湊口番所（御番所）を設置する。

最盛期を迎えた17世紀後半～18世紀初頭には家数558軒、人数3470人、船25艘を数え「室津千軒」と云われた。参勤交代の寄港地であり、西の大半の大名が参勤交代の際室津に上陸し、陸路で東へ向かった。それに伴い町越えの街道の整備も行われる。町には一つ屋、肥前屋、薩摩屋、筑前屋、肥後屋、紀伊国屋の6軒の本陣があり、また廻船業で広域と交流を行った。廻船業船屋、海産物問屋魚屋の建物が現存し、当時の繁栄を伝える。

しかし江戸後期になると繁栄を極めた室津も衰退を始め、さらに近代に入ると蒸気船の導入により瀬戸内海航路から外れ、山陽鉄道の開通により陸路とも途絶した。ただし室津は海運と平行して主要産業だった漁業に移行し、あなごやいかなこを主体とする水産業が名産となり現在に至る。近年は人口の漸減と高齢化が進むが、近世の面影を残す町並みは観光資源となり、2006年水産庁が制定した「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」に選ばれている。

参考文献

- 御津町史編集専門委員会「御津町史」第一巻 御津町 2001年
- 御津町史編集専門委員会「御津町史」第三巻 御津町 1997年
- 御津町教育委員会「室山の城－語りつかれた謡の歴史」 2004年
- 御津町教育委員会「室津－伝統的建造物群保存対象調査報告書」 1988年
- 御津町教育委員会「稲富遺跡」御津町埋蔵文化財調査報告書4 2003年
- 御津町教育委員会「鞍部山39号墓発掘調査報告書」御津町埋蔵文化財調査報告書5 2005年
- 御津町教育委員会「御津町埋蔵文化財分布調査報告書」 1997年
- 兵庫県揖保郡揖保川町教育委員会「埋蔵文化財分布図」 1988年

第3章 調査の結果

第1節 概要

調査対象地は、海岸沿いにのび町の基幹となる道路に西面し、間口が約7m、山裾の東端は約10mの平面台形を呈する。東西に長い奥行は約21mを測り「蝦の寝床」といえる敷地である。敷地南東隅付近には、掘削時期が不明ながら井戸が残る。この敷地は、地番からもともとあった町家の区画が数区画に分筆されたものと推定される。道路の対面には、近世には本陣筑前屋が所在し、その南東側には御茶屋、憩会所が並んでいた。つまり近世においては、調査対象地付近は港・町の中心といえる場所であった。室津の港を描いた賀茂神社絵馬（1744年）には、本調査対象地付近に切妻・本瓦葺きの建物が描かれる。

調査対象地は庁舎と門の建設箇所の2地区に分かれ、これらを庁舎地区、門地区と称して記述する。庁舎地区は敷地東半部に位置し、東西約10.5m、南北約5.5mを測り、その東端は山裾付近となる。門地区は敷地西端の道路際に位置し、東西約2m、南北約5mを測り、庁舎地区西端からは約7m離れる。

第2節 基本層序

1. 庁舎地区

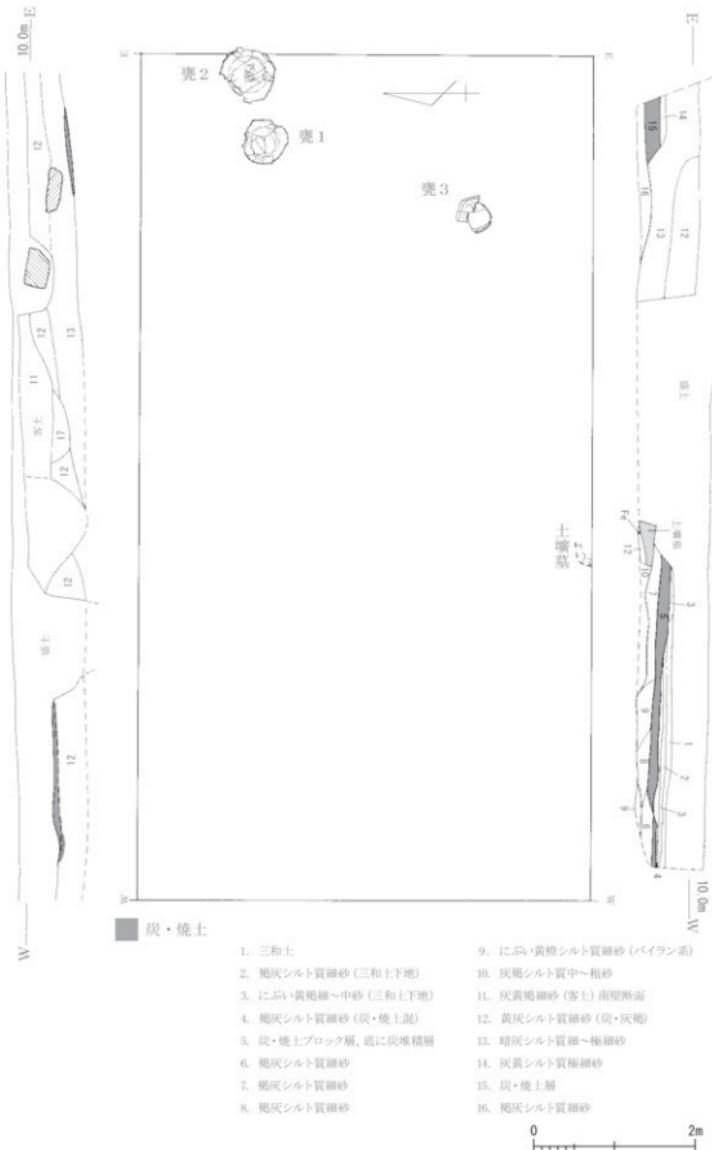
調査の結果、整地層と判断された土層のうち、上半部については盛土および客土（11層）であり、これらの上面での遺構は認められなかった。また、13層については調査区東の山側から流入した自然堆積層の可能性が高く、その堆積は東から西へ向かっての傾斜を有しており、中央部以西では上層の下部深くに入り込んでいる可能性が高く、今回調査対象とした。掘削深度では検出できなかった。

堆積層は上下2層に大別でき、東端部では下層である13層が11層直下に認められる。西半部では盛土直下が堆積層の上層である12層となっていた。12層上面では砂礫や角礫、焼土が入った擾乱穴が多く認められ、西部では12層上面に焼土面が認められた。この焼土面については、火災を想定することが可能かと考える。これは火災の痕跡が顕著に認められる南壁の5層下面に対応する可能性があり、東半部の12面直上も含めて一連の生活面をなすものと考える。

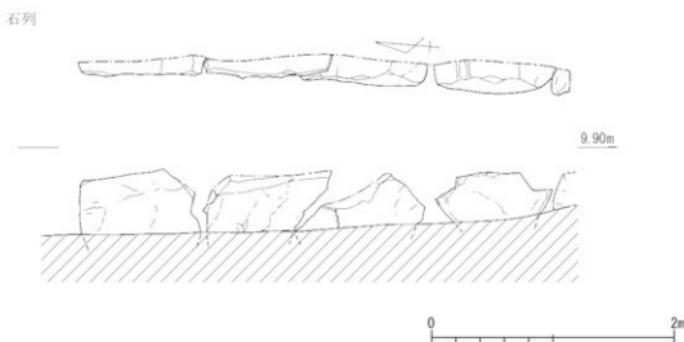
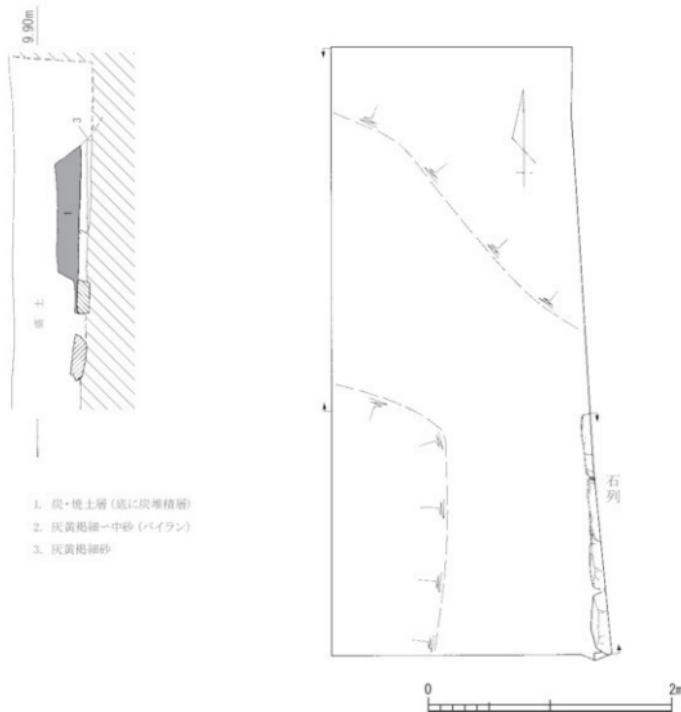
12・13層には多くの遺物を包含している。12層では近世までの遺物を含み、13層には6～7世紀と12世紀末～15世紀頃までの遺物を含んでいた。なお11層には近代までの遺物を含んでいる。なお13層出土遺物のうち特筆できるものは石鍋の破片がある。

調査区東端から西へ約3mの範囲は12層上面の高さが1段（30cm前後）高くなっている。この箇所は調査区外で南北に延びていた現存する石垣の線と合致し、ある時期、町屋の東端となっていた可能性がある。この部分では備前焼や土器など多くの遺物が出土し、下面から備前焼の埋甕底部が2点東西に並んで検出された（埋甕遺構）。ただし、検出状況から12層の上面はかなり削平されていることが考えられる。この南壁では炭化物や焼土、粘土などがブロック状に混じる黄色や褐灰色などを呈する層が、2～10cm程度の厚さで比較的狭い範囲に幾層にも認められた。整地層とするには面数が多く薄いことから、堆積層の可能性を考えておく方が妥当ではないかと考える。

南壁付近の土層の状況は、東半部では北壁と同様の堆積が認められる。12・13層が東から西へ傾斜をもって堆積し、東端付近では炭・焼土層（15層）を検出した。炭・焼土層が認められる状況は北壁東半部の状況に対応するものと考えるが、東半部の炭・焼土層は西半部にみられる炭・焼土面よりも下層となることが明らかであり、調査対象地では少なくとも2度の火災があったことが想定できる。



第7図 庁舎地区 平・断面図



第8図 門地区 平・断面図

調査区南西半では盛土直下となる地表下40~50cmで三和土（1層）とそれに伴う整地層（2・3層）を検出した。これらは近代の町屋に伴うものと考える。さらにその下層には炭・焼土の集積層（5層）を検出した。この層は約10cmの厚さをもち火災後の整地層であると考える。なおこの最下層には炭が約1cmの厚さで層をなし、火災時に置ける生活面であったと考える。1~3層を近代の所作とするなら、5層は近代以前のものであり、少なくとも調査区中央より西側については近代以前には町屋として整備されていたことが明らかであろう。5層以下では7層直下で土壤墓が掘り込まれており、7層直下にも生活面が存在する可能性がある。7層以下は風化バイランを含む砂層となる。

2. 門地区

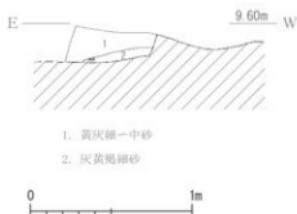
擾乱などで遺構面の残存は良好ではない。西壁の土層観察では、北西部部分のみプライマリーな状況が確認できる。部分的に残存した一部では盛土直下（地表下0.35m）で厚さ約15cmの炭・焼土集積層（1層）を検出した。この状況は庁舎地区南西部の土層の状況と同じであり、庁舎地区5層と一連のものと考えられ、敷地の西半部には炭・焼土層が広がっているものと推定される。なお庁舎地区南西部で検出された三和土による面は確認できなかったが、本地区の1層より上の面が対応し、一連の町屋であったことが考えられる。庁舎地区5層と同様に1層の最下部には炭が層をなし、火災前の生活面であったと考える。この面では断面で炭層に覆われた礫を2石検出した。礫は上面が平坦であることから建物の礎石であると考えられるが、調査区の制約により詳細を調査しえなかつた。礫の規模は15~20cmである。礎石の時期は明確にしえないが、庁舎地区的状況をかんがみれば、近代以前と考えるのが妥当であろう。2層以下は風化バイランを含む砂層となる。庁舎地区的9~10層に対応するものと考えるが、少なくとも調査対象とした掘削深度においては、中世までさかのほる明確な生活面は確認しえなかつた。

第3節 遺構

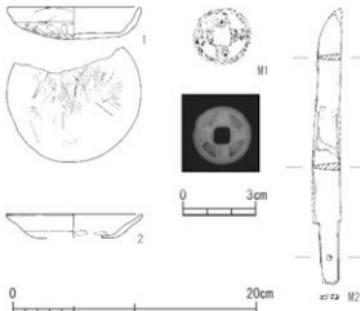
1. 庁舎地区

土壤墓

調査区中央付近の南堀際で南北方向に向く鉄刀を検出したため、精査したところ、その東側で銅鏡、土師器皿が出土した。鉄刀は切先を南側に向ける。さらに裏面を精査したところ落ち込みが認められの中に遺物があること、出土遺物のセットから中世墓と判断した。本棺の痕跡が認められないことから



第9図 土壌墓土層断面図



第10図 土壌墓出土遺物

土壤幕と推定する。遺構は平面では検出しえず、断面でのみ確認した。北側は調査区内で終結するが、南側は調査区外へ続く。また東半部は擾乱により損なわれている。断面観察によると、遺構の掘り込み面は7層直下である。規模は残存幅50cm、深さ20cmを測る。

埋甕遺構（甕1・2）

調査区北東隅で備前焼甕が東西に並んだ状態で検出した。甕は底部付近のみが残存しており、掘方は検出しえなかった。本来設置した面は不明であるが、検出面は12層の下面である。掘方の形態は不明であるが、甕底部のレベルをみると、甕2はほぼ水平なため、掘方底部に水平に据え置いたものと考える。甕1は底部が東から西へや傾斜をもっている。甕底部の上側では覆土中から数多くの備前焼甕の破片が出土し、甕の上部が斜面上部からの流入土などによって押しつぶされ、破片となって内部および周囲に散在したものと推定される。

甕3

埋甕遺構南西側で検出した。埋甕遺構同様に底部のみ残存し、掘方は検出しえなかった。残存状況が不良のため明確な時期は明らかではない。

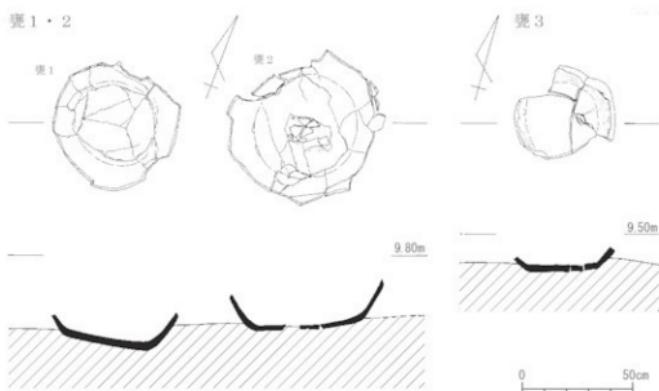
便甕

甕3の西側で検出した。近代以降の遺物だが、内部からプラスチック片が出土したことから、現代まで用いられたものと考える。この遺物については写真のみ掲載した。

2. 門地区

石列

南東隅の東壁際で検出した。調査区の制約から検出したのは1段、検出長2mである。50cm以下の縦を南北方向に並べ西面をそろえている。したがって西側が表面となるのであろう。5石を検出したが南側は調査区外へ続く。また裏込めの状況も調査区の制約により調査しえなかった。遺構の時期は明らかにしないが、炭や焼土を作わないことから、火災以前の近世の町屋に伴うものではないかと考える。



第11図 埋甕遺構

図 1



図 2

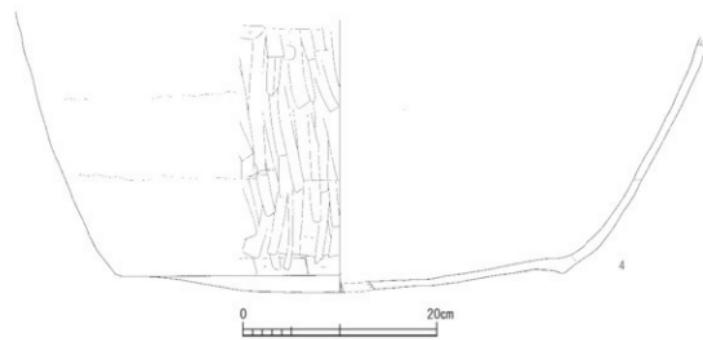


図 3



第 12 図 埋藏遺構遺物

第4章 出土遺物

1 遺物の出土状況

今回の調査によって出土した遺物は、土器・石製品・金属製品がある。土器はコンテナ（TS28）に換算して16箱分出土し、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、国産陶磁器、中国製磁器等の土器類をはじめ、面子・土鍤等の土製品が出土している。また、量的には少ないが石鍋の石製品、刀・釘の鉄製品、中国鏡が出土している。

このうち遺構から出土したのは、中世墓跡から出土した土師器の皿（1・2）、刀（M2）、中国鏡（M1）と埋葬遺構より出土した備前焼甕（3～5）がある。その他はすべて包含層より出土している。

2 土師器

土師器は、甕、皿、椀、鍋、羽釜が出土している。量的には土師器皿が多い。

(1) 甕形土器（6・7）

焚口部分の破片が2点出土している。いずれも体部は内傾し立ち上がり、掛口端部に粘土帯を貼り付け、隅丸方形の付け庇をもつ。

付け庇系統の甕（福田孝司1978）で平安時代以降の特徴をもつ。このタイプの甕の下限については、13世紀後半の広島県草戸千軒遺跡の遺構からの出土事例があり、この時期におさまる甕と考えておきたい。

(2) 皿（1・2・8～68）

出土した皿は大きく3つの特徴をもっている。ひとつは大きさで、口径6.8～8.5cm、10.2～12.6cm、15.8cmの大きさのものがある。最小の一群を小皿、真ん中の一群を中皿、最大の皿を大皿と呼ぶ。ふたつめは、おそらく使用粘土の違いによる差と思われる焼き上がりの色調である。乳白色を呈する白色系の皿、淡褐色～橙色を呈する橙色系の皿、暗褐色を呈する褐色系の皿に分けられる。

最後は成形技法の違いで、手づくね成形の皿と、輥轆成形の皿が出土している。輥轆成形の皿は、いわゆる「回転台土師器」とも呼称されているが、ここでは輥轆土師器（長谷川眞2004）と呼ぶ。

小 皿（8～27・57～66）

小皿は手づくね成形の皿（8～27）的一群と輥轆成形の一群（57～66）が出土している。

手づくね成形の皿は、外面体部指押さえ、内外面口縁部ヨコナデ、内面体部ナデ調整を基本とする。外面のヨコナデは27のように端部のみ施される皿もある。形態的には、10～24の一群众は歪みが著しく全体の状況把握に不明瞭な点があるが、口縁部の特徴から幾つかのタイプに分かれる。色調は白色系・橙色系・褐色系に分かれる。

8・9は口縁部が短く直線的に立ち上がる皿である。橙色系と白色系のものがある。10～22は口縁が外反ないしは内彎する皿である。11のように直線的に口縁が立ち上がるものと、短く内彎し立ち上がる10・12・14・18～21、短く外反する15～17がある。白色系・橙色系・褐色系のものがある。22～24は口縁部内面の立ち上がりが屈曲し、口縁部が外反する白色系の皿である。25・26は口縁部が外面ともに内彎して立ち上がる皿である。褐色系と橙色系がある。27は所謂「へそ皿」と呼ばれる外面底部が窪んだ白色系の皿である。口縁部が短く内彎あるいは外反して立ち上がる12～21の一群众の12・13・15・18・21と、22～24の一群众の22・23は内面に右回りのヨコナデ調整を施しその先端を引き上げる15世紀以降の京

都系土師器皿に顕著に見られる技法（伊野近富1995）が採用されている。

輥轆成形の小皿は、白色系・橙色系・褐色系のものがある。底部の切り離しがヘラ切り（57・60・65）と糸切り（58・59・61～63・64・66）の皿がある。57～60は短く立ち上がる口縁をもつ皿である。57・58は短く直線的に立ち上がる皿である。57は褐色系の回転ヘラ切りの皿で、口縁端部に煤痕が見られ、灯明皿として使用されている。58は褐色系で回転糸切りの皿である。59・60は短く外反する口縁をもつ皿である。59は褐色系で回転糸切り、60は橙色系で回転ヘラ切りの皿である。

61～64は口縁が外反あるいは内彎気味に立ち上がる皿である。いずれも白色系で回転糸切りの皿である。63は口縁端部に煤痕が見られ、灯明皿として使用されている。

65は口縁が大きく外反する回転ヘラ切りの皿である。

66は外方に大きく外傾する皿で、口径に比べ底径の小さい回転糸切りの皿である。

中皿（1・2・28～55・67・68）

中皿は手づくね成形の皿（1・2・28～55）と輥轆成形の皿（67・68）がある。輥轆成形の一群は器高が高く杯に近い器形である。

手づくね成形の皿は、その色調から白色系・橙色系・褐色系に分かれる。調整は外面体部指押さえ、内外面口縁部ヨコナデ、内面底部ナデを基本とするが、28・29のように外面口縁部のヨコナデが端部付近にのみ施される皿もある。また48・50の皿は内面のヨコナデ調整の端をナデ上げる京都系土師器皿の技法が採用されている。

2・28・29は口縁部が大きく外反する皿で、2・28は橙色系、29は白色系である。30・31は、口縁端部が面取り様の皿である。30が橙色系、31は白色系の皿である。1・32～36は口縁部が内彎して立ち上がる皿である。白色系、橙色系、褐色系のものがある。

37～49は張り出し気味の体部をもち、口縁部が

第1表 土師器皿の特徴

報文番号	口径	種類	成 形	切り離し	色 調
14	7.6	手づくね			褐色系
25	7.3	手づくね			褐色系
8	7.8	手づくね			褐色系
10	7.8	手づくね			褐色系
12	8.0	手づくね			褐色系
13	8.1	手づくね			褐色系
11	8.5	手づくね			褐色系
18	7.4	手づくね			白色系
22	7.5	手づくね			白色系
27	7.5	手づくね			白色系
17	7.9	手づくね			白色系
26	7.9	手づくね			白色系
19	8.0	手づくね			白色系
16	8.1	手づくね			白色系
20	8.1	手づくね			白色系
23	8.1	手づくね			白色系
24	8.1	手づくね			白色系
9	8.4	手づくね			白色系
15	8.4	手づくね			白色系
21	8.5	手づくね			白色系
58	8.2	輥 輶	糸切り		褐色系
59	7.7	輥 輶	糸切り		褐色系
65	7.4	輥 輶	ヘラ切り		褐色系
66	6.8	輥 輶	糸切り		褐色系
60	7.4	輥 輶	ヘラ切り		褐色系
57	7.7	輥 輶	ヘラ切り		褐色系
64	7.1	輥 輶	糸切り		白色系
62	7.4	輥 輶	糸切り		白色系
61	7.5	輥 輶	糸切り		白色系
63	7.7	輥 輶	糸切り		白色系
28	10.2	手づくね			褐色系
1	10.8	輥 輶	ヘラ切り		褐色系
33	11.8	手づくね			褐色系
45	12.5	手づくね			褐色系
32	10.8	手づくね			褐色系
30	10.9	手づくね			褐色系
2	11.0	手づくね			褐色系
41	11.0	手づくね			褐色系
46	11.3	手づくね			褐色系
43	11.5	手づくね			褐色系
42	11.6	手づくね			褐色系
54	11.7	手づくね			褐色系
44	11.8	手づくね			褐色系
53	12.0	手づくね			褐色系
40	12.2	手づくね			褐色系
36	12.6	手づくね			褐色系
38	10.7	手づくね			白色系
50	10.7	手づくね			白色系
37	10.8	手づくね			白色系
47	11.2	手づくね			白色系
51	11.4	手づくね			白色系
55	11.4	手づくね			白色系
29	11.8	手づくね			白色系
31	11.8	手づくね			白色系
49	11.8	手づくね			白色系
34	11.9	手づくね			白色系
39	12.0	手づくね			白色系
48	12.0	手づくね			白色系
52	12.4	手づくね			白色系
35	12.5	手づくね			白色系
56	15.8	大皿	手づくね		褐色系

大きく外方に開く皿である。37~40・50のように端部を丸くおさめるものと、41~49のように端部を擒み上げた受け口状の皿がある。白色系・橙色系・褐色系のものがある。

50・54は、外反気味の口縁部をもつ皿である。54は外面底部に板状工具による調整痕が認められる。50が白色系、54は橙色系である。51は全体的に器厚を薄く作り、口縁部が大きく外反する皿である。白色系である。

52・53・55は平底状の底部から口縁部が直線的に外傾する皿で、白色系の52・55と橙色系の53がある。53は底径が大きく口縁部が肥厚するもの、55は底径が口径に対して小さい皿である。内面の底部と口縁部の境に溝みをもつ55ともたない3がある。

楕橢成形の皿（67・68）は、底径が大きく、器高も高い杯タイプの皿である。いずれも糸切りの皿で、67が回転糸切り、68は静止糸切りである。67は白色系、68は橙色系である。

大 皿 (56)

平底の底部から口縁部が大きく直線的に開く皿である。口縁部は肥厚しながら立ち上がる。褐色系の皿で内面のヨコナデの端をナデ上げている。

出土した皿はいわゆる京都系土師器皿の範疇として理解できるものが多い。ここでは京都系あるいは京都産土師器皿の編年の研究成果や神戸市兵庫津遺跡の成果を参考に、出土土師器皿について検討する。

土師器小皿のうち口縁部が短く内彎して立ち上がる12~21の一群の12・13・15・18・21と口縁部内面の立ち上がりが屈曲する22~24の一組の22・23については内面ヨコナデの端をナデ上げる特徴をもっている。このナデ上げの技法は、京都系土師器皿では15世紀以降に出現するIタイプの皿に顕著に見られる（伊野1995）、この一組の時期もこの時期を想定したい。27は京都系土師器皿Gb-3タイプで15世紀代に比定できる。28・29は京都系土師器皿Iタイプの範疇と理解でき、15世紀~16世紀中葉におさまると考えている。2・52・55・56の中皿と大皿もIタイプの皿で、55は内面に圓線のある1bタイプ、2・56は圓線のない1aタイプの範疇におさまる。2・56が16世紀後葉~17世紀前半、56が15世紀~16世紀中葉に比定される。30・31・53は京都系土師器皿のJタイプの範疇におさまるもので、面取り様の口縁端部をもつ30・31は、13世紀代、53は14世紀代の所産と考えられる。

口縁部が大きく外反する37~49の一組は神戸市兵庫津遺跡分類の非楕橢土師器ⅢB類に相当し、兵庫津遺跡では14世紀を中心とした時に出現する（長谷川眞2004）。

楕橢土師器のうち口縁部が短く立ち上がる57・58は兵庫津遺跡楕橢土師器I類に近似しており、13世紀代の所産であろうか。61~66は、Ⅲ類の範疇（長谷川眞2004）と理解でき、近世の所産と考えておきたい。

67・68の杯タイプの皿は、京都市内の調査で近似した皿が出土し、12世紀を中心とした時期（V期）と考えられている（小森俊寛・上村憲章1996）。

(3) 槌 (69・70)

輪高台をもつ69と円盤状の高台をもつ70がある。69の高台は粘土紐を貼り付けて作られ、断面は逆三角形を呈する。70はわずかに突出した円盤状高台をもち、内面体部との境に段を持たないタイプである。外面底部には回転糸切り痕を残す。

69は吉備系の土師質土器椀Bの範疇で捉えられ、退化した輪高台の特徴から最終段階のものと理解できる（鈴木康之1955）。14世紀末~15世紀代の所産と考えられる。

(4) 鍋・羽釜(71~78)

鍋は遺存状況が悪く、口縁部のみの破片である。口縁部の特徴から、口縁端部が外方に拡張する71、口縁の断面が三角形を呈する72、口縁が肥厚し端部を四角くおさめる73、受口状の口縁部をもつ74・75がある。71・74は内外面にハケ目を施すもので、72・73のように外面体部がタタキ調整のものもある。71は須恵質の焼き上がりになっている。

羽釜は口縁部が内傾する76・77と口縁部が直線的に立ち上がる78がある。77は三足の釜である。76・78は内外面にハケ目調整を施すものである。

外面にタタキ目を残す72・73の鍋は、兵庫津遺跡分類（長谷川眞2004・2007）の鍋形タイプ鉄かぶと形に分類でき、72が15世紀後半、73が15世紀前半に比定できる。受口状の口縁部をもつ74・75は同タイプの鉄鍋形に分類でき、74が13世紀後半、75が14世紀前半に比定できる。

羽釜は76が長谷川分類の羽釜タイプにの範疇におさまり14世紀代と考えられる。77の三足付の羽釜は13世紀の所産と考えられる。口縁部が短く立ち上がる78は鋤柄分類（鈴柄俊夫1988）のC1-2類の範疇と理解でき、13世紀前半と捉えておく。

3 瓦器・瓦質土器 (79~93)

(1) 瓦器 (79~83)

皿 (79) と椀 (80~83) がある。79の皿は内面に放射状のミガキが施されている。80~83の椀はいわゆる和泉型瓦器椀の範疇で捉えられ、内面にのみ暗文の痕跡が認められる。

(2) 瓦質土器 (84~93)

鉢 (84)・鍋 (85)・羽釜 (86~91)・壺 (92)・火鉢 (93) がある。

84の鉢は口縁部が玉縁状で、外面には指押さえ痕が明瞭に残る。85は受口状の口縁をもつ鍋である。羽釜は口縁部が短く立ち上がる86~88と内側する口縁をもつ89・90がある。変わったところでは注口付の小壺92がある。底部は回転糸切り痕が残る。93は体部に印花文を施した火鉢の破片である。

80~83の瓦器椀は和泉型瓦器椀の範疇で捕らえることができる。器面の磨耗が著しいことや底部を欠く椀が多く、器形のみの判断ではあるが、和泉瓦器椀の編年（尾上実他1995）に従えば、Ⅲ期～Ⅳ期のものに相当すると理解でき、13世紀代の所産と考えられる。

瓦質土器については、京都・大阪での瓦質土器編年（鈴柄俊夫1988・1989・1995）を参考にする。受口状の口縁をもつ鍋85は、京都型瓦質焼成土器鍋3類の特徴をもち、13世紀後半～14世紀前半に比定できる。86~88は京都型瓦質焼成土器釜C1類の範疇と理解し、13世紀代の所産と考える。口縁部が内側する90は、河内・和泉型瓦質焼成土器釜A類の範疇と理解し、14世紀前半のものと考える。

体部外面に花文をスタンプする火鉢 (93) は、大和地域の分類（立石堅志1995）を参考にすれば、花文をスタンプする火鉢は浅鉢I類で、その時期は14世紀を中心とした年代が考えられる。

4 須恵器 (94~104)

須恵器は、壺 (94)・皿 (95)・椀 (96・97)・捏鉢 (98~104) がある。

94は格子目のタタキが施された破片で、土師器のような軟質の焼き上がりである。壺の破片と考えられる。

95は口縁端部を肥厚させ丸くおさめた小皿である。

96・97の椀は、96は口縁部が外反気味に立ち上がる椀である。97は底部回転糸切りの椀で、丸味を帯びた体部をもち、口縁部は外反して立ち上がる。色調は白色を呈する。

98～104の捏鉢は、口縁端部を四角くおさめる98、口縁部断面が三角形の99～101・104、口縁部が玉縁状の102、口縁端部を丸くおさめる103がある。口縁部の断面が三角形を呈する99～101・104の一群は、内面の体部と口縁部の境が屈曲する99・101と、屈曲部をもたない100・104に細分できる。捏鉢は外面口縁部が黒化する重ね焼きの痕跡を留める。

94は格子目タタキ痕の特徴から、岡山県南西部で焼かれた亀山焼（倉敷市）の甕と考えられる。

97の椀は焼き上がりの色調も白色を呈し、東・西播系須恵器では見られない色調と器形である。むしろ備前焼など吉備系の範疇で理解するものと考える。備前焼II期のカニガ谷上池窯跡より同形の椀が出土しており、13世紀前半～14世紀初頭に比定されている（石井啓・重根弘和2005）。この椀の生産地の有力な候補として考えておきたい。

捏鉢については、東播系須恵器の範疇と理解できる。以下東播系須恵器の編年（森田稔1995・池田征弘2004）によれば、端部が四角い98が12世紀前半、99・101は12世紀後半、100・104は12世紀末～13世紀前半、102・103は13世紀後半に比定される。東播系須恵器の一群はおよそ12世紀～13世紀後半の時期におさまる。

5 備前焼(3～5・105～107)

備前焼は甕（3～5）と捏鉢（105・107）・鉢（106）がある。

甕（3～5）はすべて埋甕造構に伴って出土している。4・5は底部のみ遺存しているもので、全容は明らかではない。4は外面底部周縁部に5箇所の窪みが確認され、窪み内には粘土が付着している。窓詰めの際、粘土塊で固定した痕跡と理解できる。外面胴部には板ナデ調整の痕跡を明瞭に残す。

3は直立して立ち上がる頸部と外傾する玉縁状の口縁部をもつ甕である。胴部内外面には、明瞭な板ナデ痕を残す。

捏鉢は口縁端部を四角くおさめた105と端部が大きく上方に拡張する107がある。内面には柳状工具による櫻目がみられ、いずれも6本/1単位の櫻目である。

鉢106は口縁端部を尖らせ、端部外面に面をもつ小振りのものである。

備前焼の分類・編年（間壁忠彦・間壁蘿子1966・1968・1984・伊藤晃他2004・重根弘和2003・2006）によれば、3の甕は備前焼IV-Aに属し、14世紀前葉～15世紀中葉に比定できる。

捏鉢105がII-A、107がIV-B-2に属し、それぞれ13世紀前葉～14世紀初頭、15世紀中葉～16世紀初頭のものと考えられる。

6 中国製磁器（108～126）

白磁・青磁・染付（青花）の皿・碗・壺がある。

(1) 白 磁（108～115・125）

皿（108～113）・碗（114・115）と白磁四耳壺（124・125）がある。108・110～113の皿は口縁端部を除き全面に施釉された皿、いわゆる口禿の皿である。

碗は口縁端部が平坦な114と口縁部が大きく外反する端反りの碗115がある。

124・125は四耳壺の口縁部と底部破片である。

124は玉縁状の口縁部で、釉調は透明度が高くやや青味を帯びた青磁様の仕上がりである。125の高台部は無軸で、高台脇を内側に鋭く削り出し、断面の形が逆台形である。

(2) 青 磁 (116~123)

杯 (116)・皿 (117)・碗 (118~123) がある。118は同安窯系の碗であるが、それ以外は龍泉窯系の製品である。

杯116は内面に蓮弁を施したものである。

117は内面に花文をヘラ描きした輪花皿である。青味を帯びた緑色を呈する上手のものである。

碗118は、内外面に櫛状工具で施文している同安窯系の碗である。119・120は外面に鍋蓮弁文を施した碗である。123は内面見込みに「正」の字文を陽刻したものである。

(3) 染 付 (126・127)

幕筒底の皿 (126) と輪高台の皿 (127) がある。

126は外面底部の釉を搔きとており、外面には擬人化した字文、内面には花文が描かれる。127は高台豈付が無軸で、内外面に花文を描いた皿である。高台内には「大〔 〕」の字文が描かれる。

中世前期については大宰府編年案（横田賢次郎・森田 勉1978・山本信夫1995）、後期については小野正敏（小野1982）・上田秀夫（上田1982）・續伸一郎（續伸1995）各氏の業績を参考に検討する。

白磁皿のうち口禿げで全面施釉の皿 (108・110~113) は皿Ⅸ類に相当し、13世紀中頃～14世紀初頭に比定される。

114は楕圓類に相当し、12世紀中頃～13世紀前半に比定される。114は楕V-2類で12世紀代の碗である。

124は玉縁状の口縁部から四耳壺Ⅲ 1類の範疇に、また125は特徴的な高台の作り方から四耳壺Ⅲ 3類にそれぞれ比定でき、11世紀後半～12世紀前半の年代が考えられる。

内面に連弁を施す青磁杯116は龍泉窯系青磁杯Ⅲ-3b類に相当し、13世紀中頃～14世紀前葉に比定される。117の輪花皿は15世紀前後～中葉頃のものと考えられている（上田秀夫1982）。

内外面にクシ状工具による文様を施す同安窯系青磁碗118は、楕Ⅲ-1b類に相当し、12世紀中頃～後半に比定できる。119・120の外面に鍋蓮弁文を施す碗は、龍泉窯系青磁楕I-5b類に相当し、13世紀初頭～前半のものである。

122は底部のみの破片で確定はできないが、青磁楕I類の範疇であろうか。

126の幕筒底の染付皿は15世紀後葉～16世紀前葉に比定できる。127の染付皿は16世紀末頃の特徴をもつ（小野正敏1982）。

7 国産陶磁器 (128~135)

瀬戸・美濃焼系と肥前系の陶磁器がある。

(1) 瀬戸・美濃焼系 (128・130・131)

皿 (128)・碗 (130)・鉢 (131) がある。128は小皿で、口縁部が外反し、端部を丸くおさめたものである。130は天目茶碗で高台端部は無軸である。内面見込み部に目跡を残す。131は折線の口縁部をもつ深皿である。

(2) 肥前焼系 (129・132~135)

施釉陶器碗 (129)、青磁香炉 (132)、染付皿 (133・134)・碗 (135) がある。

129の碗は高台部が無釉で、縁味を帯びた失透性的灰釉が施される。132は幅広の豊付をもつ青磁香炉で、内面は無釉である。133は内面に回線状の文様を施した皿である。134は内面蛇の目釉ハギの皿で、松葉文が描かれる。135の碗は外面に花文が描かれる。

瀬戸・美濃焼系 (藤澤1993・1995)・肥前陶器 (大橋康二・尾崎葉子1988) の編年研究を参考に検討する。瀬戸美濃焼系の127は端反り皿に分類でき、大窯Ⅰ期の15世紀末~16世紀前葉に比定される。130の天目茶碗は、高台部の特徴から17世紀中頃のものと理解したい。131は折縁深皿で古瀬戸後期様式の特徴をもち、14世紀後半~15世紀初頭に比定される。

129は肥前陶器の灰釉碗で、高台部の作りから17世紀末~18世紀後半におさまると考えられる。内面蛇の目釉ハギの皿134は、18世紀後半の特徴をもつ。135の碗は19世紀前半に比定できる。

第2表 出土土器の様相

種類	形種	年代									備考
		11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c	
上	碗										
	皿										京都系土器器
	碗										吉備系
	鍋・別茶										
丸	碗										和泉型瓦器碗
	鍋										京都型・河内・和泉 型瓦器燒成土器
	鍋・羽釜										
	火鉢										大和地域
円筒	甕										龜山甕
	碗										圓前縫
	控体										東播系
	桶										
筒瓦	甕										
	皿										
	碗										
	深皿										
切妻瓦	碗										施釉陶器・染付
	皿										染付
	白磁										
小切妻瓦	青磁										祖母窯・同安窯系
	染付										
	石										長崎市西彼杵平島?

8 土製品・ミニチュア土器・瓦 (136~141)

土鍤 (136・138)・面子 (140・141) の土製品、土師質の羽釜のミニチュア土器 (139)、軒平瓦 (142) がある。

土鍤は、長さ4cm前後の小さなもの (136・137) と長さ9cmの大型のもの (138) がある。

面子は土器を転用したもので、140が指ナデとヘラ磨きが施された土師器、141が片面にハケ目が施された陶器質のものである。中世段階の可能性がある。139のミニチュア土器と142の軒平瓦は近世の所産と考える。

9 石製品（143・144）

石鍋の把手（143）と体部の破片（144）がある。143は把手断面が長方形の瘤状把手をもつ石鍋である。砥石として転用されている可能性がある。144は底部が平底の石鍋で、外面に削り出しの整痕跡が明瞭に残る。

石鍋の分類・編年研究（木戸雅寿1995）によると、Ⅱ類-a-1に相当し、10世紀末～11世紀前半に比定される。

144は口径と底径が同じ特徴をもつⅡ類とは異なり、口径に比べ底径が小さいⅢ類以降の新しい要素をもつ。

10 金属製品

銅錢（M1）と刀（M2）・釘（M3・4）がある。銅錢は劣化が進み判読しにくい面もあるが、北宋錢の「元祐通寶」（初鋳造：1086年）と思われる。

刀（M2）は鍔をもたない平造の小刀である。身と茎の境の刃部と棟部に間をもつ、両間式の刀である。茎部の目釘孔は、1箇所あけられている。

釘（M3・4）は頭巻きの釘で、断面は四角形を呈する。いずれも先端を欠く。

11 出土遺物について

以上、先学書諸氏の業績を参考に、遺跡から出土した土器の時期、産地等の抽出をおこなった。

遺構の出土品について言及すると、中世墓からは、16世紀末～17世紀前半の京都系土師器皿（Iタイプ）が出土している。備前焼を埋置いた埋甕遺構群のうち埋甕2からは14世紀前葉～15世紀中葉の甕が出土している。その他の埋甕遺構から出土している備前焼甕は底部のみの出土であるため確定はできないが、同時期の可能性がある。

今回の調査で出土した遺物は、11世紀後半～19世紀前半までの期間におさまり、当遺跡が平安時代か近世まで存続したと理解できる。その構成は13世紀から14世紀にかけて、西は備前焼・龜山焼などの吉備系土器の搬入が認められ、東はいわゆる京都系土師器の範疇で捉えられる皿の一群と和泉型瓦器椀、京都型および河内・和泉型の瓦質土器、大和型の火鉢など京都・大阪・奈良系の土器が認められる。14世紀後半には瀬戸・美濃焼系の搬入が確認できる。

備前焼は古い段階のⅡA類の擂鉢が出土している。播磨地域西部に位置し岡山県境に近い、たつの市福田片岡遺跡・宝林寺北遺跡でⅠ・Ⅱの段階の備前焼椀が出土しており、東播系須恵器と共に存する状況がみられる（松岡千寿2003）。当遺跡からも同時期の東播系須恵器が出土しており、これらの遺跡と様相は変わることはない。ただ、福田片岡遺跡・宝林寺北遺跡では備前焼椀のみが出土しており、擂鉢は確認されていない点が当遺跡と異なる。

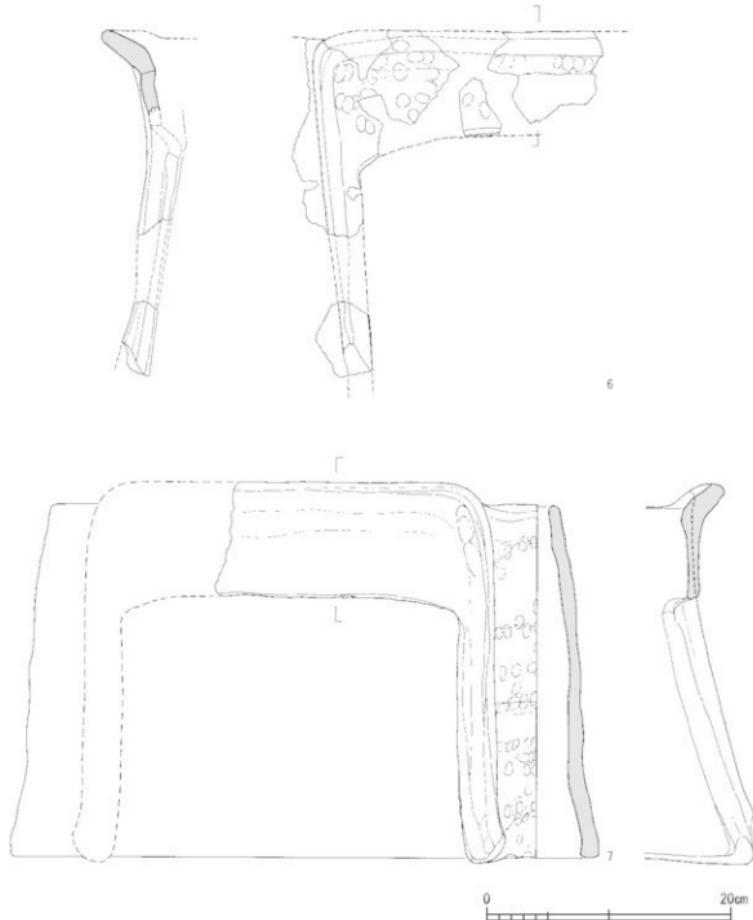
中国製陶磁器については、12世紀から13世紀のものが主体である。

註

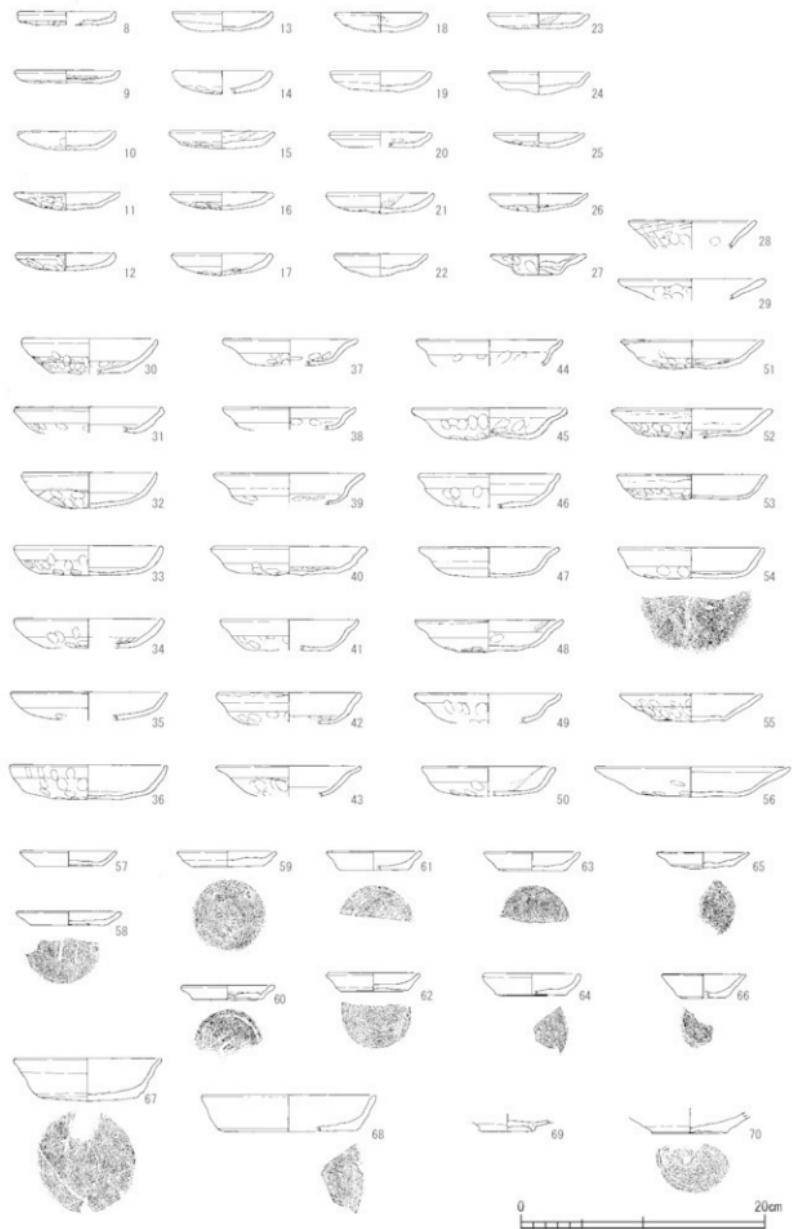
※ この須恵器椀については、乗岡 実（岡山市教育委員会）・宇垣匡雅（岡山県教育庁）氏に実見していただいた。備前焼系の範疇にはおさまらず、むしろ兵庫県産ではないかとのご意見をいただいた。

引用・参考文献

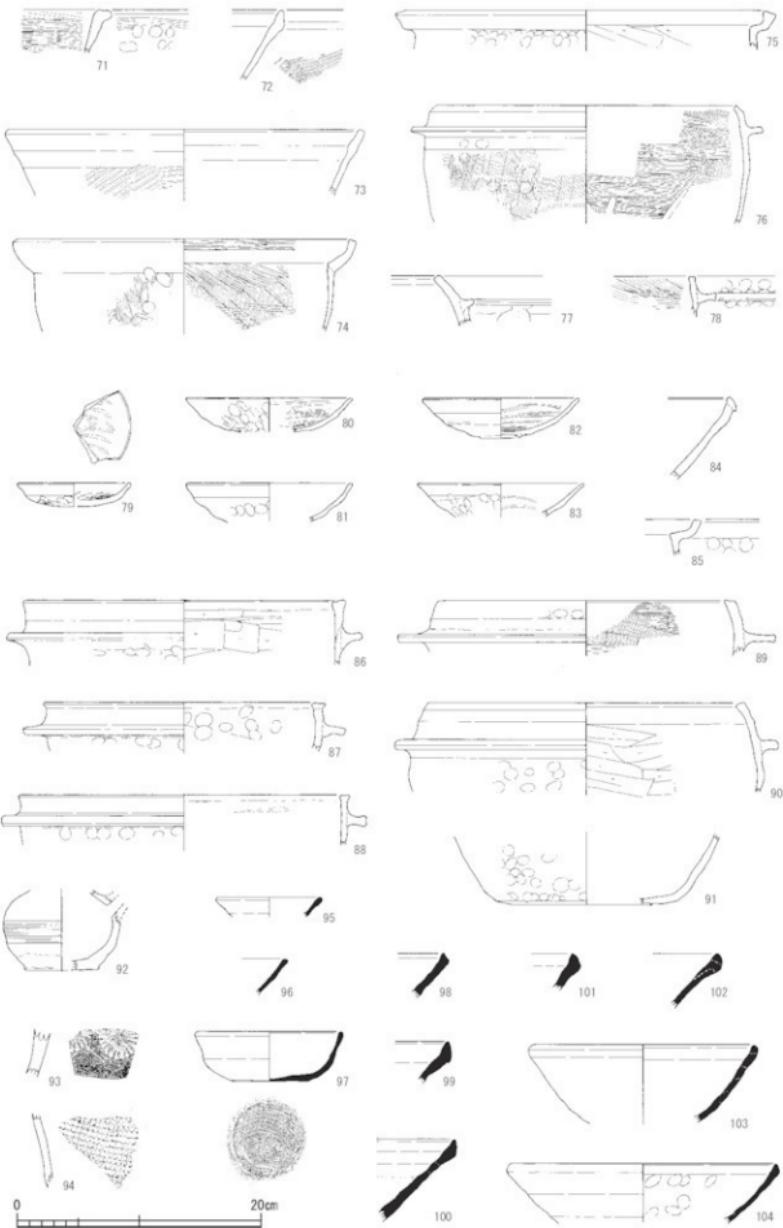
- 小森俊寛・上村憲章1996 「京都の都市道路から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所
- 伊野近富1985 「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 中井淳史2007 「播磨地域の中世土器」『城館からみた中世の播磨』第8回播磨考古学研究集会資料集
- 長谷川眞2004 「IV遺物 B. 中近世の遺物 1 土器・陶磁器 (1)土師器・土師質土器」「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告 第270冊 兵庫県教育委員会
- 長谷川眞2007 「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 福田孝司1978 「忌の龜と王権」『考古学研究』第25巻 第1号 考古学研究会
- 鈴木康之1955 「土師質土器検」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 尾上 実・森島康雄・近江後秀1995 「瓦器検」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 鶴柄俊夫1988 「畿内における古代末から中世の土器－模倣系土器生産の展開－」『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会
- 鶴柄俊夫1995 「瓦質土器(各地の瓦質土器)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 鶴柄俊夫1989 「大阪不南部の瓦質土器生産(2)」『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会
- 立石堅志1995 「奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 石井啓・重根弘和2005 「備前焼」『中近世土器の基礎研究』X-IV 日本中世土器研究会
- 森田 乾1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 池田征弘2004 「IV遺物 B中近世の遺物 1 土器・陶磁器 (4)須恵器」「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告 第270冊 兵庫県教育委員会
- 問壁忠彦・問壁直子1966・1968・1984 「備前焼研究ノート」(1)～(4)『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18
- 重根弘和2003 「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』 近藤喬一退官記念事業会
- 重根弘和2006 「中世の備前焼」『備前市歴史民俗資料館紀要』8 備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会生涯学習課
- 伊藤 見他2004「中世陶器の物流－備前焼を中心として－」『日本考古学協会2004年広島大会研究発表資料集』 日本考古学協会2004年広島大会実行委員会
- 横田賢次郎・森田 勉1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 山本信夫1995 「貿易陶磁器(中世前期の貿易陶磁器)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 續伸一郎1995 「貿易陶磁器(中世後期の貿易陶磁器)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 小野正敏1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫1982 「14～6世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会
- 藤澤良祐1995 「中世陶器(古瀬戸)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 藤澤良祐1993 「瀬戸大窯の時代」『瀬戸市史陶磁史』篇四 瀬戸市
- 大橋康二・尾崎栄子1988 「有田町史」古窯編 有田町史編纂委員会
- 木戸雅寿1995 「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 松岡千寿2003 「播磨出土の備前焼」『研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所



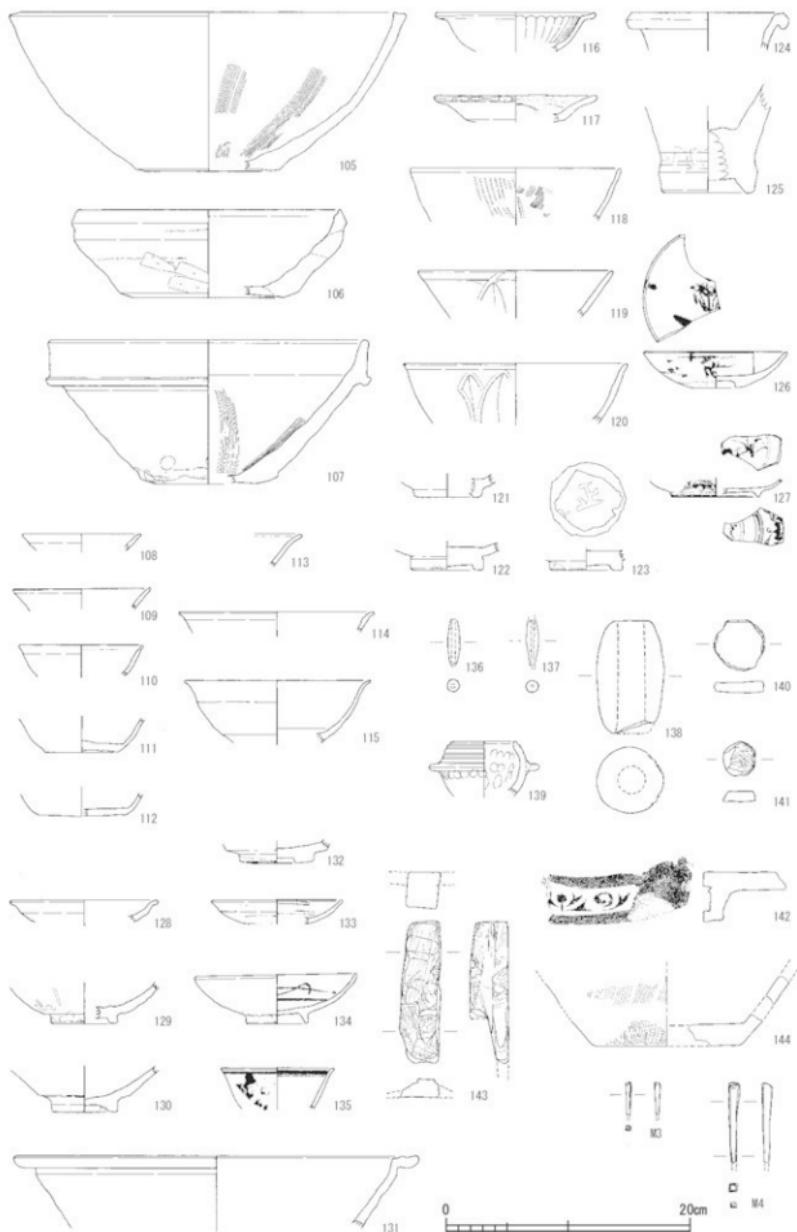
第13図 包含層出土遺物(1)



第14図 包含層出土遺物[2]



第15図 包含層出土遺物(3)



第16図 包含層出土遺物(4)

第5章 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林絢一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1はじめに

たつの市御津町室津四丁目に所在する室津四丁目遺跡は、瀬戸内海の港湾都市遺跡である。現海岸線から約30m内陸にある調査地点より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。PLD-18963は、12層より採取した最外年輪を含む炭化材で、現地表面から約50cm下の地点で採取した。調査区西部では地表50cm下で焼土面が確認されているが、試料採取地点には焼土面ではなく、宅地化に際して盛土された同層が存在し、元は焼土面を形成していたと思われる焼土を多く含んでいる。

第3表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-18963	調査区：北西半部北壁 層位：12層 深度：現地表面から50cm下 その他：盛土層だが施土層の焼土を多く含む	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（硫酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 L5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

3 結果

第2表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第17図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

測定の結果、 1σ 曆年代範囲（確率68.2%）で1296-1312 cal AD (24.4%)および1359-1387 cal AD (43.8%)、 2σ 曆年代範囲（確率95.4%）で1288-1323 cal AD (39.0%) および1347-1393 cal AD (56.4%)と、13世紀末～14世紀の値を示した。

第4表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

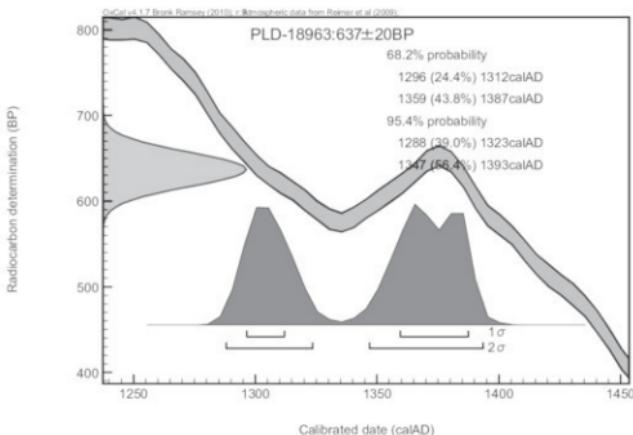
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-18963	-27.68 \pm 0.13	637 \pm 20	635 \pm 20	1296AD (24.4%) 1312AD 1359AD (43.8%) 1387AD	1288AD (39.0%) 1323AD 1347AD (56.4%) 1393AD

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第17図 曆年較正結果

第6章　まとめ

今回の発掘調査は、室津の集落内で行われた考古学的調査の最初の例となった。室津における考古学的調査は集落東側の尾根上に所在する室山城が唯一の例である。室山城は現存するのは尾根上の本丸、二の丸とされる曲輪のみで、後世の地形変更などにより城の全容は不明である。二ノ丸では発掘調査が行われ複数の曲輪、堀、土塁などが検出される。また平安後期以降の遺物が多数出土している。出土遺物の多さや煮沸具の出土があることから居住性の高い城館的性格をもつ城の可能性があり、その廃絶時期は17世紀前葉とされる（註1）。室津における唯一の発掘例である室山城の成果と、今回の調査結果とを対比してみたい。

白谷朋世氏は室山城の出土遺物について検討を行い5期に分けた（註2）。

第1期 平安後期～鎌倉時代（11～13世紀）

第2期 室町時代～嘉吉の乱頃（14～15世紀前半）「赤松氏室山城期」

第3期 嘉吉の乱頃～戦国時代（15世紀後半～16世紀半ば）「山名氏室山城期」、「浦上氏室山城期」

第4期 織豊期～江戸初期（16世紀後半～17世紀初頭）

第5期 江戸中期～幕末期（18世紀中頃～19世紀中頃）

室山城は2期に城として機能し始め、3期は出土遺物量が最も多く盛期を迎える。城は3期末に落城したとされるが、第4期にも遺物の出土がありその後も城としての機能は維持され、5期との間に空白期があることから、江戸時代初期に廃城となったことを指摘している。

室山城出土遺物の時期区分を港における画期と対比させてみる。

1期は室御厨とそれに続く平氏による瀬戸内海航路の整備と重ね合わせることができ、港湾の整備時期と重複する。4期は毛利から織田の支配を経て姫路藩の支配が開始される時期と一致する。したがって城と港はその盛衰がリンクしているといえるだろう。

今回出土した遺物の大半は11世紀後半～19世紀前半までの期間におさまる。この時期幅は白谷氏による時期区分とも合致し、さらに13～15世紀に量的なピークを置くのも同じ傾向である。したがって室津四丁目遺跡は城あるいは港と関わる遺跡であると判断する。遺物の大部分が出土した層位は、山側からの流入土層と考えられる12・13層であり、その供給源は室山城の所在する尾根や山腹に求めができるかもしれない。室山城の全容は後世の地形変更により現状では明らかにしえないが、尾根上だけでなく港に面した西斜面やその山裾付近、特に本調査区背後にあたる見性寺と寂靜寺が所在する付近がテラス状となることから、この部分になんらかの施設を有していたことは否定できないだろう。これについては今後の調査を待ちたい。

古代からの港町として知られる室津だが、現在見られる景観は近世以降に形成されたものと考えられる。近世の動向は多くの文献史料により明らかにされているが（註3）、近世をさかのほると史料は断片的となり、近世の地誌などから何うほかはないのが現状である。今回の調査で検出した近世をさかのほりうる遺構としては、土壤墓、埋葬遺構があり、出土遺物の年代観は、前者が16世紀末～17世紀前半（4期）、後者が14世紀前半～15世紀中葉（2期）である。

備前焼窯を用いた埋葬遺構は、12世紀以降寺院での僧侶の埋葬に用いる例がある。和歌山県にまとまった例があるほか、兵庫県内でも須磨山遺跡（神戸市西区）、新宮山遺跡（養父市）があり（註4）、今回検出した埋葬遺構も同じ性格のものである可能性がある。

現在室津には見性寺、寂靜寺の他に徳乘寺、淨運寺、大型寺があり、いずれも集落背後の山裾に所在している。ただし淨運寺は、もとは山下にあったのを17世紀中頃に移転、見性寺は奥畠という所にあつたのをこの地に移したものとされる（註5）。現存する寺院もその立地は中世までさかのはらないようである。1716（享保元）年には前記の寺院のほか、見性寺末寺である大雲寺、淨名寺、觀音寺の計8ヶ寺が所在している（註6）。これら寺院は現存しないが、大雲寺は町の北側に記され、17世紀半ばには朝鮮使節を要応する際姫路藩主の宿舎として用いられたとされる。またこれらとは別に圓通寺、發通寺などの寺院が存在した伝承もある。

1389年に足利義満は戦神社の帰途、船から「磯ぎわなる寺」に入り赤松義則の接待を受けたとされる（註7）。また近世の室津湊口番所の所在地は見性寺の末寺である龍福寺があったと記されている（註8）。これらが同一の寺院を示すのかは明らかにできないが、現存しない寺院が海岸沿いにも所在していたことがわかる。現存する寺院も過去に移転したのが多く、近世に町が整備される以前、少なくとも中世の室津は現存する町並みとは異なる景観だったと思われる。寺院の中には山裾や集落となる海岸沿いに立地するものもあったようである。

室津港の船溜まりは港が整備されるまで港の最深部付近であったと考えられ、中世の港湾施設や町は山と海岸に挟まれたごく限られた範囲であったと思われる。調査区南西側の海岸付近に所在した御茶屋の敷地は小西行長が支配した際に代官所が置かれた地であり（註9）、「政所屋敷」の伝承があったという（註10）。「政所屋敷」の伝承がどこまでさかのはるかは明らかにしないが、室御厨あるいは中世以前までさかのはる港湾を管理する施設が所在した地の可能性があり、湾の最深部である調査区付近は少なくとも中世においても室津の中心となる場所であったと考えられる。代官所あるいは「政所屋敷」の実態、その全容は不明であるが、本調査区はその一角に含まれか、あるいはその隣接地である可能性もある。また行政的な施設に隣接して寺院が所在し、その境内であったとも考えられる。

火災について

今回の調査では断面観察で少なくとも2面の焼土面や炭の集積層を確認した。また遊離した試料であるが12層より採集した炭は、分析により13世紀末～14世紀という年代を得ている。

確認した焼土面や炭の集積層は火災に起因するものと考える。室津における火災の事案としては、詳細不明ながら1184（寿永3）年室泊が平氏により焼き払われたとの記録がある（註11）。近世以降では、1651年に大火が、明治2年5月尾之町字积迦堂の2軒の藁葺屋根の家屋が焼失する火災が発生している（註12）。調査時の聞き取りでは時期不詳ながら江戸時代に火災があったとの伝承が残っているとのことであった。室津は中世において幾度も戦乱の場となっており、記録はないものの、これらの戦いに伴う火災が発生していたとも考えられる。

庁舎地区南西部および門地区で検出した炭の集積層は、その後に三和土による床面が造られていることから、近世後半～近代初頭のものと推定される。記録にある明治2年の事案とは時期が近いが、尾之町字积迦堂の地名は現在失われてその位置は不明であり、同一の火災であったかは明らかにしない。火災の中には积迦堂の事案程度の記録に残らない小規模な火災は発生していたと思われる。

その他

出土遺物の中には、國化しえなかつたが6～7世紀の土器片がある。奈良時代をさかのはる室津の状況は全く不明であり、現在は古墳も存在しない。ただし古代と同様に瀬戸内海航路の潮・風待ちの港であったことは想定することができ、なんらかの港湾施設、あるいは集落が存在していた可能性は否定し

きれない。

また御津町付近には岩見北山古墳群、綾部山古墳群（註13）、壺根古墳群（註14）などでは集落や可耕地と隔離した海岸沿いに築造された古墳がみられ、海に基盤をもつ被葬者が想定される。このような古墳の例から、城山の尾根上に海を眺望する古墳が所在した可能性も考えられる。

註)

- 註1 御津町教育委員会「室山の城－語りつがれた説の歴史」 2004年
- 註2 白谷朋世「室山城土塁難考」 間壁直子先生喜寿記念論文集「考古学の視点」 2009年
- 註3 兵庫県立歴史博物館「ひょうごの港めぐり」 2009年
- 註4 西口圭介氏のご教示による。
- 註5 「室津道考記」 御津町史編集専門委員会「御津町史」第四巻 御津町 1999年
- 註6 「室津村明細帳」 御津町史編集専門委員会「御津町史」第四巻 御津町 1999年
- 註7 「鹿苑院殿底鳥詠記」 御津町史編集専門委員会「御津町史」第三巻 御津町 1997年
- 註8 「姫路砦鐵」 御津町史編集専門委員会「御津町史」第四巻 御津町 1999年
- 註9 御津町教育委員会「室津 伝統的建造物群保存対策調査報告書」 1988年
- 註10 前掲註5
- 註11 前掲註1
- 註12 前掲註9
- 註13 御津町教育委員会「御津町埋蔵文化財分布調査報告書」 1997年
- 註14 相生市史編纂専門委員会「相生市史」第五巻 相生市 1989年

第5表 出土土器観察表(1)

※口径・底径値 () : 復元値 器高値: 残存値

報告 番号	埠固 番号	写真図版 番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考
								口径	器高	底径	
1	10	7	疗舍南壁中央付近	土壤墓周辺		土師器	中皿	(10.8)	(2.65)	-	褐色系 外底部へク傷痕 内面右斜面ナデ
2	10	-	疗舍南壁中央付近	土壤墓周辺		土師器	中皿	(11.0)	(2.6)	-	褐色系 外底板状工具調整 内面指押え痕
3	12	卷頭1・7	疗舍北東端	埋甕2	12~13層	無柄陶器	甕	96.4	(75.8)	(43.3)	偏前後 内外面板ナデ
4	12	7	疗舍北東端	埋甕1	12~13層	無柄陶器	甕	-	(28.8)	(46.4)	偏前後 外底深み部 (5箇所) 内粘付着
5	12	7	疗舍	埋甕3		無柄陶器	甕	-	(9.65)	39.4	偏前後
6	13	8	疗舍	-		土師器	肧形土器				焚口部 付け底系
7	13	8	疗舍	-		土師器	肧形土器				焚口部 付け底系
8	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	(7.8)	(1.1)	-	褐色系
9	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	8.4	1.65	-	白色系 内面右回転ナデ歪み著しい
10	14	8	疗舍北東端	-	12~13層	土師器	小皿	7.8	1.6	-	褐色系 内面右回転のナデ
11	14	8	疗舍北東端	-	12~13層	土師器	小皿	8.5	1.5	-	褐色系 歪み
12	14	8	疗舍北東端	-	12~13層	土師器	小皿	8.0	1.5	-	褐色系 内面ナデ上げ (右回り)
13	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	8.1	1.65	-	褐色系 内面ナデ上げ (右回り)
14	14	10	疗舍南東半	-		土師器	小皿	(7.6)	(1.9)	-	褐色系
15	14	8	疗舍南東半	-		土師器	小皿	(8.4)	(1.4)	-	白色系 内面ナデ上げ
16	14	8	疗舍北東端	-	12~13層	土師器	小皿	(8.1)	(1.4)	-	白色系
17	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	(7.9)	(1.8)	-	白色系 内面右回転ナデ
18	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	7.4	1.55	-	白色系 内面ナデ上げ (右回り)
19	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	8.05	(1.75)	-	白色系 内面右回転ナデ
20	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	(8.1)	(1.25)	-	白色系
21	14	8	疗舍南東端	-	11~12層	土師器	小皿	8.5	1.7	-	白色系 内面ナデ上げ (右回り)
22	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	(7.5)	(1.85)	-	白色系 内面ナデ上げ 外底板状工具調整
23	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	8.1	1.3	-	白色系 内面ナデ上げ (右回り)
24	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	(8.1)	(1.85)	-	白色系 歪み著しい
25	14	10	疗舍北東半	-	12層	土師器	小皿 (照明皿)	(7.3)	(1.15)	-	褐色系 口縁端部保有者
26	14	8	疗舍北半	-	13層	土師器	小皿	7.95	1.5	-	白色系 歪み著しい
27	14	8	疗舍南東端	-	11層	土師器	小皿	(7.5)	(1.65)	-	白色系 口縁端部ヨコナデ
28	14	10	疗舍南東端	-	11層	土師器	小皿	(10.2)	(2.3)	-	褐色系 口縁端部ヨコナデ
29	14	10	疗舍北東半	-	12層	土師器	中皿	(11.8)	(1.75)	-	白色系?
30	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(10.9)	(3.9)	-	褐色系 外口縁部へラ傷痕
31	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.8)	(2.4)	-	白色系 口縁端部沈縫
32	14	9	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	10.8	(3.0)	-	褐色系
33	14	9	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.8)	(2.45)	-	褐色系
34	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.9)	(2.4)	-	白色系
35	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(12.5)	(2.3)	-	白色系
36	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(12.6)	(2.85)	-	褐色系
37	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(10.8)	(2.15)	-	白色系 内面指押え痕
38	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(10.7)	(1.8)	-	白色系 内面指押え痕
39	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(12.0)	(2.5)	-	白色系 内面指押え痕
40	14	10	疗舍南東端	-	13層	土師器	中皿	(12.2)	(2.4)	-	褐色系 口縁端部面取り 内面指押え痕
41	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.0)	(2.6)	-	褐色系 歪み著しい
42	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.6)	(2.55)	-	褐色系 内面指押え痕
43	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.8)	(2.4)	-	褐色系 内面指押え痕
44	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(12.5)	(2.55)	-	褐色系 内面指押え痕
45	14	10	疗舍北半	-	12~13層	土師器	中皿	(11.3)	(2.75)	-	褐色系 内面指押え痕
46	14	10	疗舍北半	-	13層	土師器	中皿	(11.3)	(2.75)	-	褐色系

第6表 出土土器観察表(2)

報告番号	拂団番号	写真団版番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			備考
								口径	器高	底径	
37	14	10	疗倉南東半	-		土師器	中皿	(11.2)	(2.45)	-	白色系
48	14	-	疗倉北平	-	13層	土師器	中皿	(12.0)	(2.6)	-	白色系 内面ナデ上げ
49	14	10	疗倉北東端	-	12~13層	土師器	中皿	(11.8)	(2.4)	-	白色系
50	14	10	疗倉北東端	-	12~13層	土師器	中皿	(10.7)	(2.45)	-	白色系 内面ナデ上げ
51	14	10	疗倉南西半	-	5層以下	土師器	中皿	(11.4)	(2.25)	-	白色系
52	14	10	疗倉南西半	-	5層以下	土師器	中皿	(12.4)	(2.45)	-	白色系? 内面指押え痕
53	14	9	疗倉北東端	-	12~13層	土師器	中皿	(12.05)	(2.0)	-	褐色系
54	14	-	疗倉北平	-	13層	土師器	中皿	(11.7)	(2.6)	-	褐色系 外底板工具調整
55	14	-	疗倉北東半	-	12層	土師器	中皿	(11.4)	(2.75)	-	白色系 内底周囲隈む
56	14	9	疗倉北平	-		土師器	大皿	(15.8)	(2.5)	-	褐色系 内面左回転ナデ 端部ナデ上げ
57	14	8	疗倉北東半	-	12層	土師器	小皿 (灯明皿)	(7.7)	(1.25)	(5.4)	褐色系 口縁端部側付着 底部回転ハラ切り
58	14	8	疗倉南東半	-		土師器	小皿	(8.2)	(1.4)	(6.2)	褐色系 回転系切り 外底板状工具調整
59	14	8	疗倉北平	-	13層	土師器	小皿	7.75	1.35	-	褐色系 底部回転系切り
60	14	8	疗倉北平	-	13層	土師器	小皿	(7.4)	(1.2)	(5.9)	褐色系 底部回転ハラ切り
61	14	10	疗倉南西半	-	5層以下	土師器	小皿	(7.5)	(1.55)	(6.6)	白色系 底部回転系切り
62	14	8	疗倉北平	-	13層	土師器	小皿	7.45	1.5	5.7	白色系 底部回転系切り
63	14	8	疗倉南東端	-		土師器	小皿 (灯明皿)	(7.7)	(1.55)	(5.7)	白色系 口縁端部煤 (2箇所以上) 付着 底部回転系切り
64	14	10	疗倉南東半	-		土師器	小皿	(7.1)	(1.4)	(6.0)	白色系? 底部回転タケ切り 外面タケル付着
65	14	8	疗倉北東端	-	12~13層	土師器	小皿	(7.4)	(1.4)	-	褐色系 底部回転ハラ切り
66	14	10	疗倉北平	-	13層	土師器	小皿	(6.8)	(1.95)	(4.0)	褐色系 底部回転系切り
67	14	9	疗倉	-		土師器	中皿	(11.8)	(3.5)	-	白色系? 底部回転系切り 板状工具調整
68	14	10	疗倉南東端	-	11層	土師器	中皿	(14.1)	(3.0)	(11.7)	褐色系 静止系切り
69	14	10	疗倉南西半	-	5層以下	土師器	楕	-	(1.0)	(4.5)	
70	14	10	疗倉南西半	-	5層以下	土師器	楕	-	(1.65)	(6.2)	底部回転系切り
71	15	11	疗倉東平	-		土師器	楕	(25.2)	(3.6)	-	内面面刷毛目 暗色質
72	15	11	疗倉南東端	-	11層	土師器	楕	(29.2)	(5.75)	-	外面部き目
73	15	11	疗倉南東端	-	11層	土師器	楕	(28.7)	(5.45)	-	外面部き目
74	15	11	疗倉北東端	-	12~13層	土師器	楕	(27.3)	(7.85)	-	受口状タイプ 内外面刷毛目
75	15	11	疗倉北平	-	13層	土師器	楕	(29.3)	(3.15)	-	外面部き目 内面斜位ナデ 暗色質
76	15	11	疗倉	-		土師質(硬質)	羽釜	(24.5)	(9.65)	-	内外面ハケ目
77	15	11	疗倉北平	-	13層	土師質(硬質)	羽釜 (三星)	(29.9)	(4.1)	-	
78	15	11	疗倉北西半	-	11層	土師質(硬質)	羽釜	(26.8)	(3.35)	-	内面横ハケ目
79	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦器	小皿	(9.0)	(1.9)	-	内面暗文 (強いナデ様)
80	15	11	疗倉南東端	-	11~12層	瓦器	楕	(13.3)	(2.8)	-	内面 暗文 (ループ)
81	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦器	楕	(13.3)	(3.2)	-	
82	15	11	疗倉南東端	-	13層	瓦器	楕	(12.6)	(3.3)	(3.9)	内面暗文 (ループ)
83	15	11	疗倉南東半	-		瓦器	楕	(13.2)	(2.8)	-	内面暗文 (ループ)
84	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	鉢	(28.8)	(6.75)	-	外面部押え、内面斜位ナデ
85	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	楕	(34.2)	(3.0)	-	外面部押え
86	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	羽釜	(26.0)	(5.35)	-	外面部押え
88	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	羽釜	(26.6)	(4.1)	-	外面部押え
89	15	11	疗倉東半	-		瓦質土器	羽釜	(22.8)	(4.85)	-	内面横ハケ目
90	15	11	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	羽釜	(25.7)	(7.35)	-	外面部押え 内面板ナデ (刷毛目に近い)

第7表 出土土器観察表(3)

報告 番号	拂因 番号	写真図版 番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			備考
								口径	器高	底径	
91	15	-	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	羽釜	-	(5.8)	-	外面指押さえ
92	15	-	疗倉北平	-	13層	瓦質土器	水注	-	(6.6)	(6.2)	注入部欠損 底部回転系切り
93	15	-	疗倉南東端	-	11層	瓦質土器	浅火鉢	-	(3.9)	-	奈良火鉢 外面スタンプ文(花文)
94	15	-	疗倉東平	-		須恵器	甌	-	(6.0)	-	外面格子印き目 土師質の仕上がり
95	15	-	疗倉北東端	埋造構1周辺	12~13層	須恵器	小甌	(8.3)	(1.6)	-	
96	15	-	疗倉北平	-	13層	須恵器	甌	(15.2)	(2.95)	-	
97	15	9	疗倉	-		須恵器	甌	(11.7)	(4.1)	6.3	色調白色 外口縁端部黒化 底部回転系切り
98	15	12	疗倉北西平	-	11層	須恵器	捏鉢	(29.3)	(3.65)	-	
99	15	12	-	甌1		須恵器	捏鉢	(25.6)	(3.4)	-	
100	15	12	疗倉北平	-	13層	須恵器	捏鉢	(26.7)	(6.6)	-	内面指押え痕
101	15	12	疗倉南東端	-	13層	須恵器	捏鉢	(28.4)	(3.0)	-	
102	15	12	疗倉南東端	-	13層	須恵器	捏鉢	(27.9)	(4.5)	-	
103	15	12	疗倉南東端	-	13層	須恵器	捏鉢	(17.9)	(6.4)	-	
104	15	12	疗倉	-		須恵器	捏鉢	(21.6)	(4.9)	-	内面指押え痕
105	16	9	疗倉	-		無釉陶器	捺鉢	(30.6)	(13.0)	(11.9)	備前焼(須恵質) 握日本本/1單位
106	16	12	疗倉北平	-	13層	無釉陶器	鉢	(21.3)	(7.15)	(14.5)	備前焼
107	16	12	疗倉北東平	-	11層	無釉陶器	ナリ鉢	(25.0)	(11.75)	(11.2)	備前焼 握日本本/1単位
108	16	-	疗倉北平	-	13層	白磁	皿	(9.5)	(1.45)	-	中国製磁器 口秀
109	16	-	疗倉北平	-	13層	白磁	皿	(11.0)	(1.8)	-	中国製磁器
110	16	春頭・2	疗倉北西平	-	11層	白磁	皿	(9.9)	(2.6)	-	中国製磁器 口秀
111	16	春頭・2	疗倉北平	-	13層	白磁	皿	-	(2.85)	(6.0)	外外面全面施釉 中国陶磁器
112	16	-	疗倉南東平	-		白磁	皿	(10.0)	(2.7)	-	中国製磁器 口秀
113	16	春頭・2	疗倉北平	-	13層	白磁	皿	-	(1.85)	(7.0)	外外面全面施釉 中国陶磁器
114	16	-	疗倉北平	-	13層	白磁	皿	(15.8)	(1.65)	-	中国製磁器 口沿端部平坦
115	16	春頭・2	疗倉北東平	-	盛土~11層上部	白磁	皿	(15.0)	(5.1)	-	中国製磁器 一面反査(無文)
116	16	春頭・2	疗倉東平	-		青磁	皿	(12.8)	(3.2)	-	中国製磁器 龍泉窯系 内面連升
117	16	春頭・2	疗倉北東平	-	第1層盛土~第2層上部	青磁	皿(輪花)	(12.8)	(2.2)	-	中国製磁器 龍泉窯系 内面花文 青味を帯びた緑色
118	16	春頭・2	疗倉北平	-	13層	青磁	皿	(17.0)	(4.2)	-	中国製磁器 宜興窯系
119	16	春頭・2	疗倉北平	-	13層	青磁	皿	(15.7)	(3.85)	-	中国製磁器 龍泉窯系 外面錆連升
120	16	春頭・2	疗倉北東平	-	12層	青磁	皿	(18.1)	(4.9)	-	中国製磁器 龍泉窯系
121	16	春頭・2	疗倉南東端	-	12~13層	青磁	皿	-	(1.9)	(5.5)	中国製磁器 龍泉窯系
122	16	春頭・2	疗倉北東端	-		青磁	皿	-	(2.35)	(6.0)	中国製磁器 龍泉窯系
123	16	春頭・2	疗倉南西平	-	5層以下	青磁	皿	-	(1.65)	(6.0)	中国製磁器 龍泉窯系 見込み 「正(陽刻)」
124	16	春頭・2	疗倉南東端	-	13層	白磁	四耳壺	(12.4)	(3.1)	-	中国製磁器
125	16	春頭・2	疗倉北西平	-	11層	白磁	四耳壺	-	(8.9)	(8.1)	中国製磁器
126	16	春頭・2	疗倉北平	-		染付(青花)	皿	(11.5)	(3.0)	(3.5)	中国製磁器 基筒底 費付袖振り取り 外面擬人化した字文 内面花文
127	16	春頭・2	疗倉南東平	-		染付(青花)	皿	-	(1.5)	(7.3)	高台内無釉・兜なし 灰釉(絞味を帯びた失透性)
128	16	-	疗倉南西平	-	5層以下	施釉陶器	皿	(11.8)	(1.8)	-	
129	16	-	疗倉北平	-	13層	施釉陶器	甌	-	(3.4)	(5.4)	高台端部無釉 見込み周縁目跡 加土渦戸美濃系
130	16	-	疗倉北東平	-	盛土~11層上部	施釉陶器	甌	-	(3.8)	(6.5)	高台端部無釉 見込み周縁目跡 加土渦戸美濃系

第8表 出出土器観察表(4)

報告 番号	種類 番号	写真図版 番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			備考
								口径	器高	底径	
131	16	-	疗舍北半	-		施釉陶器	鉢	(32.7)	(5.9)	-	折縁深皿 古瓶口
132	16	-	疗舍南西半	-	5層以下	青磁	香炉	-	(1.9)	(6.0)	肥前磁器
133	16	-	疗舍北半	-	12層	染付	皿	(10.5)	(1.95)	-	底部漏胎 内外面回織?
134	16	-	疗舍南西半	-	5層以下	染付	皿	(13.05)	(4.0)	5.1	肥前磁器 内面蛇ノ目稚八足、松葉文
135	16	-	疗舍北半	-	13層	染付磁器	碗	(9.2)	(3.4)	-	肥前磁器 外面花文

第9表 出出土製品他観察表

報告 番号	種類 番号	写真図版 番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			備考	
								口径	器高	底径		
136	16	-	疗舍南東部	-		土製品	土師	(3.75)	1.0	-	完形	
137	16	-	疗舍南東端	-	第2~3層	土製品	土師	(3.8)	1.0	-	両端欠損	
138	16	-	疗舍北東端	-	第3~4層	土製品	土師	9.35	5.45	-	片側端部欠損	
								口径	器高	底径	備考	
139	16	-	疗舍南西半	-	5層以下	土師器	ミニチュア刷毛	(5.1)	(4.45)	-	内面指押さえ	
								長さ	幅	厚み	備考	
140	16	-	疗舍北東半	-	盛土一 日層上部	土師器	面子 (軸用)	4.15	4.1	0.95	器種不明	
141	16	-	疗舍北東半	-	12層	陶器	面子 (軸用)	2.85	2.6	0.9	器種不明	
142	16	-	疗舍北半	-	12層	瓦	軒平瓦	(5.7)	(4.05)	1.45	中心飾り+唐草	
143	16	12	疗舍北半	-	15層	石製品	石繩	(11.7)	3.4	3.0	滑石製 瘋状把手 砥石に軸 用?	
144	16	12	疗舍北半	-	12層	石製品	石繩	- (2.6)* (2.35)	(12.1)	-	滑石製 外面彫削り底	

第10表 出出土金属製品観察表

報告 番号	種類 番号	写真図版 番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			備考
								長さ	幅	厚み	
M1	10	7	疗舍南壁内	土壤塗		銅製品	鉄	2.6	1.0	0.9	元祐通寶 (行書 北宋 初鑄造:1086年)
M2	10	7	疗舍南壁内	土壤塗		鉄製品	刀	(22.25)	1.0	0.75	61.47 切先部欠損 幅:最大 値
M3	10	12	疗舍南東端		11~12層	鉄製品	釘	(2.60)	5.45	0.45	0.89 先端部欠損 厚み:最 大値
M4	10	12	疗舍南東端		13層	鉄製品	釘	(6.50)	(4.45)	0.80	6.39 先端部欠損 厚み:最 大値

報告書抄録

ふりがな	むろつよんちょうめいせき							
書名	室津四丁目遺跡							
副書名	たつの警察署室津在所庁舎新築工事に伴う							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第414冊							
編著者名	長濱誠司・村上泰樹・バレオ・ラボAMS年代測定グループ							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号							
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むろつよんちょうめ いせき 室津四丁目遺跡	兵庫県 たつの市 御津町 室津	28229	470370	34度 45分 58秒	134度 30分 21秒	2010.8.25 ～ 2010.9.1	60 m ²	たつの警察 署室津在 所庁舎新築 工事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
室津四丁目遺跡	集落	中世	埋甕遺構・土壙墓 ・石列	土師器・陶磁器・鉄刃				

要約

室津は古代以降の瀬戸内海航路の主要港湾である。発掘調査は在所の庁舎新築工事に起因し、集落内の調査としては今回が最初となる。調査の結果、埋甕遺構、土壙墓、石列などの遺構を検出した。また遺物包含層からは中世を主体とした遺物が大量に出土し、中世以降の港湾都市の繁栄を明らかにする資料となった。

写真図版



室津港遠景（北西から）



城山からみた室津港
(東から)



調査対象地（西から）



調査対象地（東から）



庁舎地区全景（北東から）



庁舎地区全景（東から）



土壤墓（北から）



土壤墓検出状況
(北から)



土壤墓 遺物出土状況
(北から)



陶 1~3 (南から)

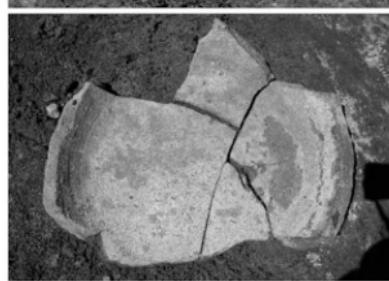


陶 1・2 (北から)



陶 1 (東から)

陶 2 (南から)



陶 3 (南から)



南壁全景（北東から）



南壁アップ（北から）



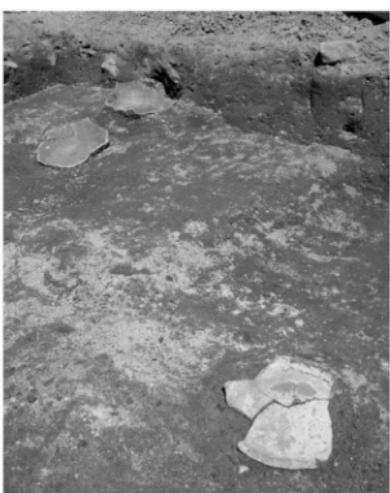
北壁（南東から）



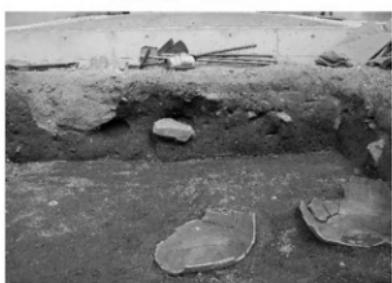
北壁（南から）



北壁西半（南西から）



壺検出状況



北壁東半（南から）



門地区全景（北から）

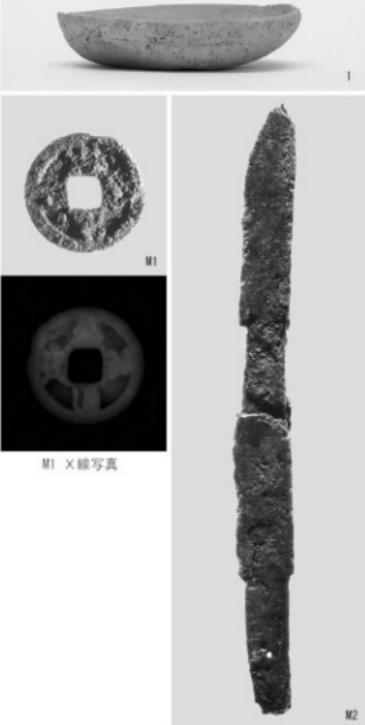


西壁断面（北東から）



石列（北西から）

土壤墓出土遺物



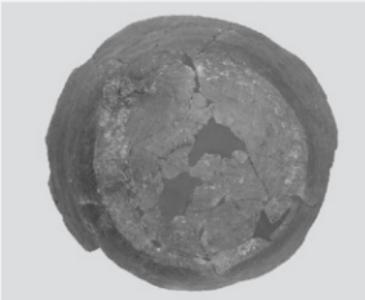
壺 2



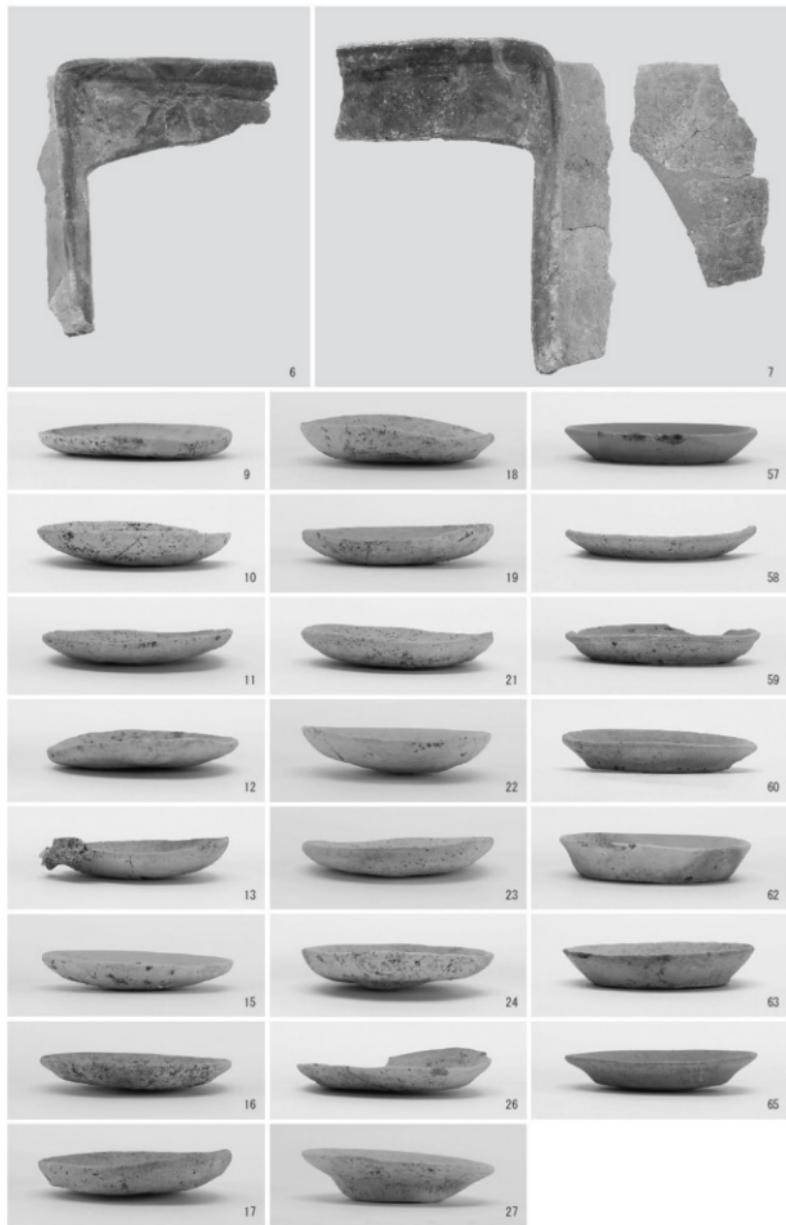
壺 1



壺 3



土壤墓出土遺物・壺 1～3



包含層出土遺物（1）



32



67



33



97



53



105



56

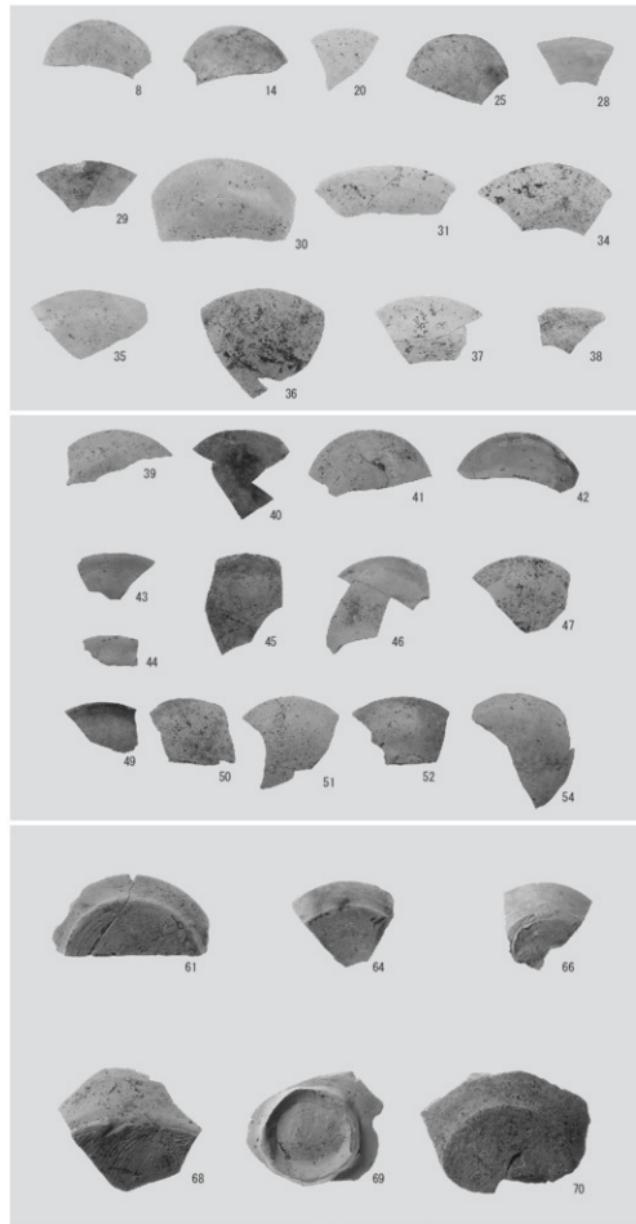


92

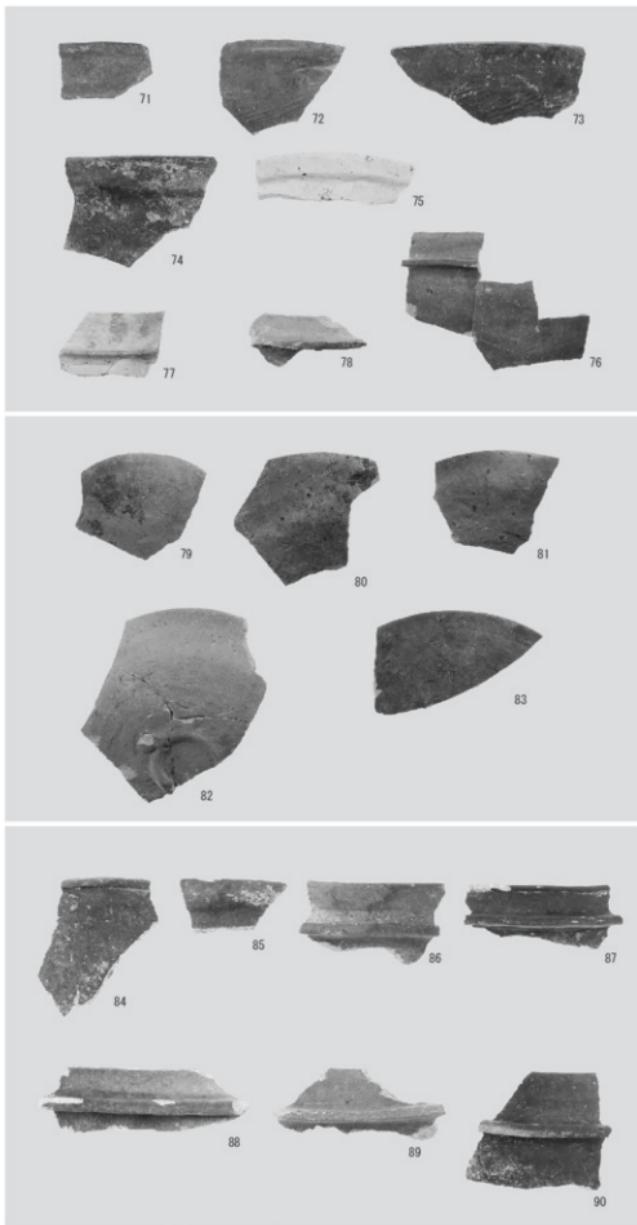


145

包含層出土遺物（2）



包含層 出土遺物 (3)



包含層 出土遺物 (3)



包含層 出土遺物 (5)

たつの市御津町

兵庫県文化財調査報告 第414冊

室津四丁目遺跡

たつの警察署室津駐在所庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24（2012）年3月26日発行

編 集 兵庫県立考古博物館

〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

Tel. 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会

〒 650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 富士高速印刷株式会社
